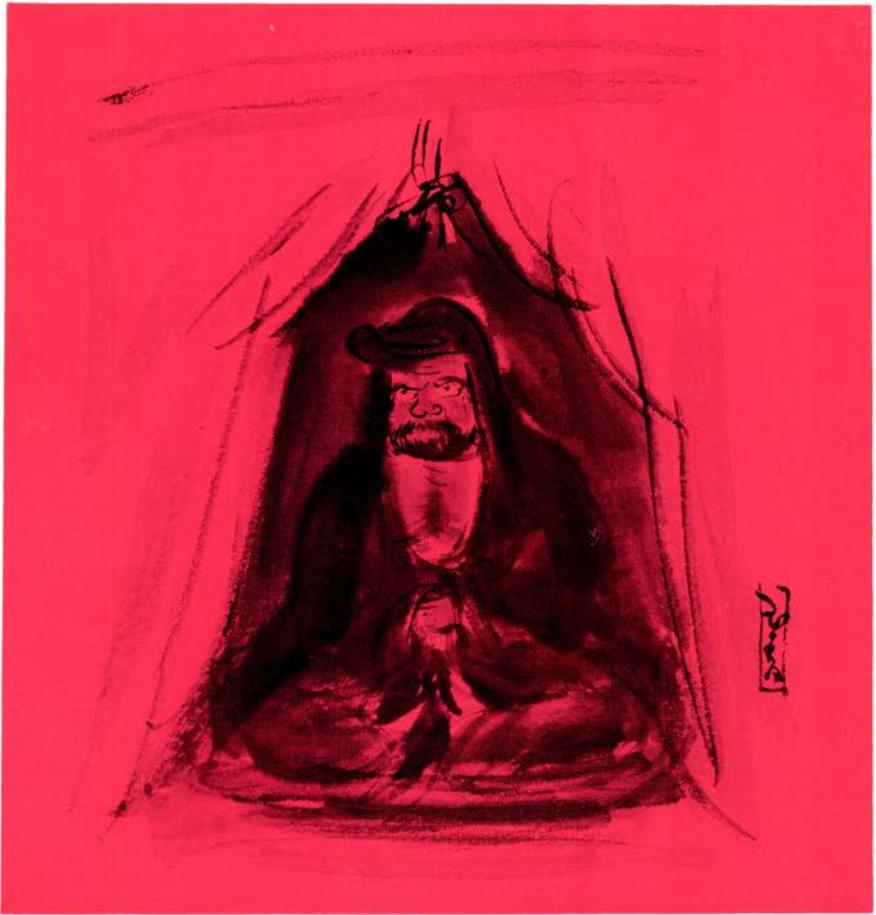


川柳塔

昭和五十四年十月二十五日印刷
昭和五十四年十二月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷六三〇号



日川協加盟

No. 630

十一月号

市場没食子・市場カネ女 共著
傘寿・金婚記念句集「夫婦」刊行記念句会

日時 昭和55年3月7日(金)六時から
会場 金属会館

地下鉄堺筋線長堀橋下車東スゲ
電話 271・3935番

柳話 中島生々庵

謝選 「夫婦」 市場没食子
「傘」 若柳潮花選

兼題 「針」 大坂形水選
「葉」 菊沢小松園選

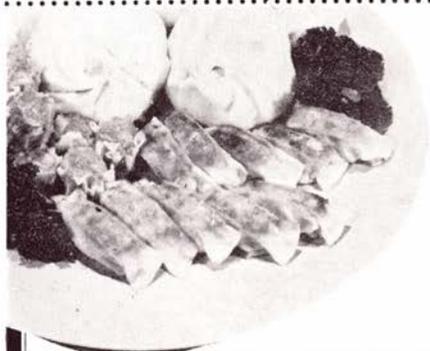
席題 一題(当日発表)各題三句
費題 千円(句集謹呈)

主催 川柳塔社

★
序文 中島生々庵 美装箱入りノ
題字 中島小石 一一九二句ノ
装画 市場カネ女 三六三ページ
編集 不二田一三夫 頒価千円下共

▼全盛期の路郎選による四十年間の成果をここに
川柳句集「夫婦」を刊行。ゼヒご一読を!

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうぞ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちゃあしゅうまん
焼売・叉焼饅

大阪・なんば



TEL (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心齋橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

八重子逝く

足枷重く人生競争あきらめる
口下手の善人ばかりで気が揃い
余生寒む寒む五勺の酒に酔いつぶれ
進行方向指さして金のない男
ボス猿に追いつめられた痩せた猿

中島生々庵

水谷八重子がなくなった。マスコミをはじめ世をあげて、その芸を賞揚し、心からその死を惜しんだ。私も大ファンで学生時代から魅力に惹かれた女優の一人だった。ただしかし、私は思った。如何に芸のムシとは言いがら、臨終ま近かだというのに、看病をやめて舞台に帰れと言ったという記事に私は目を閉じた。良重がどんな気持ちだったか、私は余りにも酷すぎると思ったからだ。幸せにも馳けつけて静かに臨終をみまもる事が出来た

からいようなものの、母ひとり子ひとり。母のない私には宿縁のきびしさ尊さに胸つまる思いであった。それから少し日がたつにつれ、人生のすべてを投入する生き甲斐であった舞台を持ち得た八重子が羨ましく。顧みて私に何かがあるか。改めて川柳というものを考えて見た。そして麻生路郎先生の「行末はどうあろうとも火の如し」の句が頭の中を横切つて行つたのが寂しかった。合掌。

川柳塔十一月号

座右の句

ちっぽけな善意でもよし心満つ

(操子)

私の句

天国へ行く階段を作る日々

島崎 富士子

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵・表紙直原玉青

八重子逝く……………中島生々庵 (1)

みち……………戸田古方 (2)

俳風柳多留廿五篇研究……………(二六丁)……………(26)

入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)……………中島生々庵選 (4)

水煙抄……………川村好郎選 (30)

柄井川柳の俳諧素養 (川柳太平記⑧)……………東野大八 (24)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………菊沢小松園 (28)

愛染帖……………(水煙抄)……………智子・君子・一三夫 (29)

川柳と人形劇と (1) — 随想風に……………橘高薫風選 (40)

川柳のふる里 弓削へ……………山村 祐 (38)

……………阿部柳太 (46)

みち

戸田古方

川柳術か、川柳道か、術とは結果を重視し道は方向と過程を重んじ、結果に気を取られない。道は、植物なら地下を起点として、地上に及び、絶えず全体を考えるもの。術は、開花と結実のみを問題にし兼ねません。術は一見、手取り早く、かしく、器用でさえあれば、手先、口先だけで達成しそっくりありますが、道の裏付けなしには根なし草です。

若い時に読んだ How to get what you want (大願成就法) という本の始めにライオンが、一声、ライオンらしい吼え方をして自分がライオンであることを自覚する話が出ていましたが、学びの始めはこれ。術としての学びは、繰返し真似をすることもしなければ、みちは未知。未知なる自らを発見すること。自らの内にあるものを、自らの手で掘り出すことからでなければなりません。それでこそ、育てる人も育てられ、培う人も、培い甲斐があるのであります。術は、術さえ誤らなければ、千遍一律の結果しか出ません。我が師、麻生路郎先生こそ、川柳術を教える前に川柳道をしっかり身につけさせて下さ

はたらくうた……(同人特集)……
雀踊子・良子・促流洞……(45)

石原青竜刀暁に死す……
東野大八……(48)

書評・島根県川柳史……
橘高薫風……(37)

54年度二賞発表句会……
有信新之助……(56)

雅号ぶっちゃげばなし……
宮口笛生……(55)

初歩教室……
本田恵二郎……(52)

大萬川柳「繰り返す」……
川村好郎選……(54)

柳界展望……
庸佑・整理……(58)

本社十月句会……
恒松町紅選……(63)

各地柳壇(佳句地10選)……
藤井明朗選……(50)

「霜」……
藤原桜山選……(50)

一路集「教育」……
川口弘生選……(51)

「皆勤」……
三夫・葉子……(67)

編集後記……

座右の句

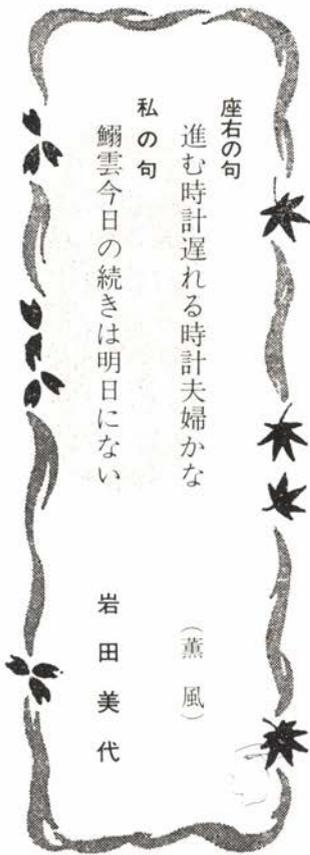
進む時計遅れる時計夫婦かな

(薫風)

私の句

鯛雲今日の続きは明日にない

岩田美代



ったお方でありました。橘高薫風さんが構造社川柳全集の一冊として「麻生路郎」を編集されました機会に、路郎先生に親しく教を受けられた方々も、また、先生をご存知ないその後の方々にも是非知って頂きたいのが先生の川柳道とはどんなものかということです。川柳雑誌時代、「川柳塔」という欄で、先生直門の作品を先生ご自身で選んで下さいました。そこに抜かれたものは、絶対的な優秀な句だけではなく、相対的に、作家の個性を第一にして、見つけて下さいました。その作家でなければ作れない句を逃さず取り上げて下さいました。それで、直門の作品は句主の名を伏せてもいいところまでできていました。先生は、こうした指導を終生続けられました。当人の持つている他人に代え難い宝を見つけることにより、各作家を陶冶し続け、真の人間に近づけていって下さったのであります。川柳術を教える人はいられても、個性をこの様に育てるのは大変、容易ではありません。誰を頼ればよいのでしょうか。ご本名、幸二郎は弱い名だが、路郎はとて強い名だと、ご自身でよく漏らされていました。相手がどういおうと、こと、川柳に関して、先生は実に厳しく、一步も妥協されませんでした。私もよく、秋の台風より、先生のおこたばを怖いと頂きました。しかし、数ある教えを受けた先生の内、一段と輝いているのが、我が師、麻生路郎の御名です。

川柳塔

中島生々庵選

松江市 中川 晃 男

ポケットに鍵束確かめひとりもの

エンジンの酒ばかり入れ男働かず

自分だけ正しく生きて不仕合わせ

褒められてそうかと信じてから落ち目

そのルーツたぐれば僕から出た舌禍

岡山市 川 端 柳 子

健やかな耳御好意を貯めておく

お話をしたい活字の人であり

おむすびを作る崩れてならぬ愛

才能が無くて小さな善意積む

ありふれた家 特製の夫が居る

倉敷市 水 粉 千 翁

まわり道ふたりのものとしてのし

約束をしたわけでなしこぼれ種

追憶へたばこの灰が落ちてゐる

吉日へ鬼の涙を見てしまひ

哀愴を沈めて鏡曇れない

倉敷市 小 幡 里 風

公定歩合どうのと僕にはうすい縁

寄せ書きの様サンダルの子沢山

台風へ風鈴の音狂わされ

自堕落な男で賭けるものがない

姑と嫁笑うて楽しい味ができ

神戸市 仲 どんたく

ナルシスとなり白蓮 水へ影うつす

アウトローへも話してくれる秋の虫

赤提灯に禁酒の覚悟試めされる

もう齢やさかいと女房たかくくり

秋寂し 女 背隠し 胸隠し

倉敷市 野 田 素身郎

真面目さがかわれ留守番させられる

新社長入社当時は飲み仲間

代り映えせぬ顔ボスターで汚される

落日へ明日定年の通勤車

秋の蚊よお前これからどうする気

高槻市

若柳潮花

嘘ついてしてもたら嘘で押しとংশ

団子屋のピラが教えている月見

秋の彩客待つ栗のイガがはぜ

拗ねているように夾竹桃の白

帯止めも衿も女は秋のいろ

尼崎市

黒川紫香

好奇心もつ蟻 も一度引き返す

使い捨てされたのが来る安定所

水平線なんぼ漕いでも行きつかず

ビル伸びてくると地球がこけそうで

法話聞く耳にすずしい蟬の声

東大阪市

市場 没食子

早飯をカバーするのに酒が要り

底辺に育ち人情が肌染み

老妻と盆の施我鬼に花持ちちつ

金によつ成らず香車で来た一生

支えれば上体起こせるまで治り

富田林市

岩田美代

砂に似た心で話聞かれてた

何とでも言わして 近頃はおとな

虫時雨ふと自分の事思ふ

ひとつ屋根男と女とこおろぎと

一日をとぼけ通している長さ

鳥取市

両川洋々

紅一点齢には触れず触れさせず

休耕田の真上で太陽ひからびる

はげかかるとメッキへ女なにを塗る

請求書かくには惜しい達筆よ

メッキなど要らぬ男で主義を持ち

鳥取県

鈴木村諷子

好きだなど一度も言わぬ妻なれど

これかばちやそつちはよその島です

太陽の真下を掘って種を播き

蟻の列ジツと見とれば愉しうて

大胆と無関心とはよう似たり

堺市

高橋 千万子

あきらめてやつと私の顔になる

インスタントの伴母が来て見ぬき

定退は御中元にも見放され

空瓶ゴロゴロそこに男の貌はない

燃えつきし夕の灰をなせいじる

竹原市

鈴木 かつ子

台所倅せそうな嫁の唄

良い事があると信じて坂登る

夫婦して築いた城に子は住まず

ひと言が心のトゲをぬいてくれ
陽の照らぬとこに善意の花は咲き

大阪市 金井文秋

はがゆいと自分も思ふかたつむり
ルール守って抜け駆けもようやらす
動けなくなつてタクトを子に譲る
ママの唄わかるとこだけ子が合わし
迎え傘の期待に添うて愛がある

松江市 柳楽鶴丸

政治の鏡は汚れたままである
閻魔さんの鏡に灰色は写らない
泥水も熱湯ものまされて来た半生
何も彼も知っていましたか
どう
一直線勇み足も多かつた

宝塚市 傍島静馬

要するに清貧という名の甲斐性なし
臆病のおかげで定年無事終える
机の位置変えてもスランプなおらない
押売に無人の奥を呼ぶ機転
急用で早退けたのがパーに居り

貝塚市 行天千代

小旅行母の荷物の大ききさよ
会うえにし別れるえにし人の世に
慢性の病気は病気と見てくれず
母の声聞きたくなつたと電話くる

びしょぬれが戻つたとたん雨が止み

今治市 長野文庫

出来事は不幸デスクは活気つき
だまり者菊の花とはよく話し
毒草にもいやな顔せぬ土の性
こんなのが釣れた釣れたと呉れもせず
人の居る証拠山肌から煙

岡山県 嘉数千代香

不況風夫を信じて従っていく
わたしにも云い分がある黙秘権
四季の花咲かせて貧しさなど云わず
金婚の夕陽へ黙の愛があり
年輪の中であやまることばかり

岸和田市 高橋操子

歩道天国夜店の金魚へ輪をつくり
俵せは夫婦で選ぶ娘の晴れ着
ただ耐えて耐えて此の世の罪を消す
女世帯きびしい祖母の心知る
こうろぎのなくねに救われた物思い

倉敷市 稲田豊作

史蹟巡りの嬉しい足に灸をすえ
おおげさに老の体操息を吐く
長寿して友の訃に泣く役回り
老人の夢瀬戸大橋を歩く
孫の成長妻の遺影も嬉しそ

和歌山市

野村 太茂津

俺の子だ俺が育てる自負がある

翔び初めた子の羽煽る憎い風

小賢しく咲くのも百花の中に入れ

隠れ蓑気付かず袖を引く男

怒り押さえて無口に昏れる愛であり

島根県

小砂 白汀

一本の糸を信じて蜘蛛下がる

ふんぎりのつかぬ海なり白い波

賞められて松は身じろぎさえてきず

風化した傷だが疼く十三時

断ちがたき絆ポトリと椿落つ

島根県

榎原 秀子

糊付けをたたむ白さと手ざわりと

月砕く川の瀬音に竹つふたり

道順を教えることにも上手下手

冷房と知って痛んだ膝怒る

カーテンのゆれにも秋がしのびより

大阪市

川口 弘生

三回忌まだ触れられぬ秘話がある

弾痕を明治生れの墓碑に見る

咲かさねばならぬ明日の花へ生き

真正直に写す鏡でうとまれる

何時までも怒っておれぬ入道雲

柳井市

弘津 柳慶

責任を取ると女は孕んで居

妻の愚痴ファンファンと聞いてやり

踏切りが上ればランドセル馳け出して

見舞客の派手さに同室の冷たい目

無責任に後援会に署名する

堺市 伏見 茂美

秋冷に夏の疲れを残す靴

ウグイスとひぐらし聞きし栗の宿

飛行雲別離の孫をふと思ひ

歩かねば何も買えないとこに住み

サンマ焼くうちわが欲しいよ換気扇

大阪市 本多 柳志

読まぬ日のつづいて重いボールペン

書を閉じて月見ること良しとする

いいかげん時効にしたい疵もち

奉る花手作りの妻が剪り

喪の女の耳にさからう嘘があり

倉吉市 奥谷 弘朗

満点でなくても人間味が光り

四季の花咲かせて妻に明日がある

宿命と割切るまでにまだ足らず

ほどほどのほどが解らぬのに困り

ナツメロがご機嫌で行く千鳥足

今治市 月原 宵明

常識にうとし英語の本を読み

料理番組材料の値に触れていず
五時五分前で役所は掃き始め
秋風に粟立つ海女の肌も歳
目薬の一滴二滴またあした

島根県

藤井明朗

ダム建設川の歴史も向きを替え
アパートの隣りは会釈だけの仲
亀になり兎にもなり人生譜
近道を歩いて人生けつまずき
心まで貧乏のくせ父も老い

鳥取県

川崎秋女

日めくりへ未だ明日がある倅よ
子を持たぬ夫婦産院の灯があかい
鈴の音が私の過去をしゃべり出す
満場の拍手へ舞台も泣いている
老い知らぬ記憶の中の亡母の顔

鳥取市

小林由多香

日照権争っている強い陽ざし
ほのぼのと善意にふれた日記閉ず
あきらめた後姿は肩で泣き
小心が逃がしたチャンス追いつづけ
のけられたひとりへ犬がついて行き

富田林市

和田維久子

砂の塔崩さぬ努力旅わびし
交々と幻まわる西吉野

幻を胸に吉野の湯のぬるし
羅針盤霧に浮かせて明日祈る
夏鶯の老声へ心ゆさぶらす

米子市

八木千代

未来図へたしかな点をひとつ打つ
出生届け先祖の一字抱き続け
なお生きるためのメッキを塗り直す
本心は心に書いて日記閉ず
一期だけ掛ける保険の義理が来る

岡山県

出原敬一

ゆらく樹の一片に散華の兄想う
夢に笑む産毛ほのかな光りもつ
飲む心理わかる一人として論し
瀬戸海のロマン慕うや晩夏の帆
孫の物編む楽しさの外は秋

島根県

梶みどり

月あかり明日もあるよとさとされて
ひとりの灯点して虫の匂をよむ
結納を亡夫に代って太く書く
子を叱るほてりを抱く母力
流しびな無事に流れて嫁ぎゆく

西宮市

杉浦婦美子

隅ずみに怠けを積んで夏を病み
夏瘦せへ負けてなるかよ朝の髪
快方に向えば秋の旅が呼ぶ

灰皿がきれいなままで夫の旅
よそ見などする暇はなし秋の蟻

大阪市 神夏磯 道子

言い負けた日に抜く白髪二、三本
くり返す波にも怒り聞える日

観音に合すその手で人を指す
ボロボロの羽根で鈴虫今日も啾く
人生譜あなたに会って書きかえる

兵庫県 辻 文平

神います方へ寝返り癌を病む
手おくれと思うが紅をひいて見る
誰もいないと泣けない女です
キャンパスの白が美しすぎる秋
三ッ程顔がほしいと思う朝

島根県 錦 織 文子

先輩のむちが支えた今日の地位
栄転も左遷も人生塗り変える
主義を持つ女の道にある誇り
夫の背へ愚痴をあずけている安堵
ひっぱたかれる孫へわびしい眼をそらし

兵庫県 北 山 越 山

毒舌をともに受けた痢の虫
妻の譜線へ月給袋が散って行き
見栄捨てて停年の靴はき変える
風呂敷に里の人情こぼれそう

妥協した男になにか酒がいる

竹原市 小島 蘭 幸

子とスキんシップの風呂呂が長くなる
玩具売場覗くおどけた顔をして
子と妻と僕とに続く道がある

よく晴れた日はカラカラと子も笑い
スランプのあとの豊かな瞳に出会う

大阪市 江城 修 史

執念に生きた命は尾を振らぬ
絆とはもろきものかなちぎれ雲
一筋の道しか見えぬ子に賭ける
饒舌の輪にいて孤独かみしめる
負け犬の人柄ほめられ馬鹿にされ

大阪市 黒田 真 砂

病む父の背のおとろえに涙する
石の声聞えて競う巖美溪 (東北旅行)
藤原の栄華三代毛越寺
八甲田恨み昔に陽が注ぎ
太古の姿知って巨岩がそそり立つ

東大阪市 竹 中 綾 女

渡りたい吊橋見つつぶス走る
あこがれの馬籠妻籠秋の風
寝覚の床伝説産んだ水碧し
どの宿もそばがついてた木曾の旅
お六揃だけを土産に木曾の旅

松江市 小林 孤呂二

鈍ぎりのうまさは財政課で覚え
腹割って話せる炉辺へ母と座す
連休を出好きな妻から誘われる
明日に持ちこしたくない疲れ浅く酔い
胸くそが悪い男性化粧品

岸和田市 古野 ひで

勿体なくもひとり暮しにある自由
疑いを知らぬ瞳に救われる
捨てられた仔猫鍵っ子抱いてやり
非常口を確かめおしめる旅の宿
御見合を母の眼鏡にまかしとき

大阪市 小出 智子

秋風にはっと仁王の眉ゆるむ
明け方の夢に期待をかけてみる
さみしさにそっと風鈴片付ける
移転通知まだ友達でいてくれる
消えかかる炎を風に煽られる

島根県 堀江 芳子

秋澄んで愚痴言うことはなにもなく
やるせなさ消したくなくて独り言
夫にだけ届くサインを夫忘れ
じゃんけんで負けてついで用の聞き
目をつむる辛さを睫毛知っている

青森市 工藤 甲吉

OPECにいじめられてる水ツ波

みな忘れさせて枕はありがたし
手も足も土を忘れてから久し
微動だにせぬのは山の姿だけ
またよたになつて台風喜ばれ

島根県 堀江 正朗

いいことを想い出させる雨の音
うたた寝を起す冷たい秋の風
いちにちがだいじ六十七になり
いい話だけではないが差し向い
妻といる安心感の初対面

大阪市 山川 阿茶

うっかり踏んだ枯葉の叫び声
線香の煙で逃げた赤とんぼ
御大切にされすぎパンツ早く死に
よちよちの孫の手を引き枯葉追う
御利益の火事にはなかつた善光寺

八尾市 高杉 鬼遊

万人の祈りを抱いて陽は沈む
鬼の目をさます八月十五日
めぐりきて夏なおくらき原爆忌
啄木のように手を見る暇もなし
玉三郎ばかりが男ではないぞ

西宮市 若林 草右

ファイブプレー今やりましたと泥払う

逃げ出した虎に浮世の冷たすぎ

駅へ出て地震のあったのに気付き

地震地図鯨は隅で苦笑い

真実を追えば追う程嘘になり

今治市 越智 一水

淋しさは誤解が解けぬまま別れ

土星の輪あくまで神秘的な光見せ

ゆく秋へ寡婦一輪の菊を活け

宴会で泳ぐ仮面の雛魚あわれ

小包の中から子の声孫の声 (老人の日)

富田林市 板尾 岳人

母が来て山の空気を持って去ぬ

バスに乗る男が読んでいた登山地図

実弾のない拳銃なら山にある

相思相愛風には弱いくりである

一枚の風が下から吹いて来る

大阪市 大坂 形水

中流の暮しぶりにも上と下

にぎにぎを悪いと思つてない所

遠山の金さんでうっ憤晴らしてる

友達の友人はだしの作品展

定年後のプラン持つてる日曜画家

大阪市 不二田 一三夫

神社から寺へ行くまでの人生か

乾杯が好きなマダム若いの声

男のうれしそうな顔に覇気がない

亡師を呼びすてにする随想欄

貞女に見える泣きみその人徳

遅番で弁当二つ持つて出る

お茶漬けの分だけ胃散飲んで寝る

尻まくるくせあり今だに平社員

共稼ぎ持つても行けぬ金ためる

兵庫県

大 江 秋 月

安宿の浴衣と土産屋知っている

五時半にもう起きてます洗濯機

情ない程この頃の記憶力

門限を聞いて温泉宿を出る

松江市

恒 松 町 紅

家の中まで過疎にして日が暮れる

百姓を乗てるバイパス買取地

新築へ庭出来ぬまま秋が来る

隣家からさす灯受験の子が一人

伊丹市

樫 谷 寿 馬

一滴まで飲み干す今日の縮括り

涙でも溜息でもない酒に酔う

兄が酌ぐと男の声を出す徳利

ワンカップ供えて神に掌を合す

姫路市 大 原 葉 香

姫路市 植 村 客遊子

狂おしく横転反転熱帯夜
夕日抱く茜の空は弥陀に似て
長命のすじと仲人付け加え

兵庫県

遠山可住

電灯の死角から秋 虫の声
立秋の月を知ってる虫の声
香水の空瓶もいちど振ってみる
にぎり飯思い出になる秋の空

倉敷市

藤井春日

住みついて心安らぐ京の四季
献立は夏バテ防ぐ妻の知恵
後輩に強くなれよと教えられ
ひたむきに生きる寡婦の修羅めいて

鳥取県

森田布堂

ポックリと死に葬式でうらやまれ
子が邪魔だ親が邪魔だという世相
太陽が沈むと上戸あてがあり
寝そべって書かれ健康祈られる

出雲市

原独仙

ランランの看護 寝たきりどう映る
冷戦中知らん顔したご挨拶
使い捨て止むなし部品おまへんで
記録ない美談数々原爆忌

西宮市

島居百酒

熟れるまで待てぬ戦野の飢餓想う

蟬時雨生者無常の殻遺し
妻病みて仏壇常着で盆迎え
脚光を夢みて虚栄の想を練る

堺市

藤井一二三

気をつけて気をつけてまた夏を病み
苦しさを体重計が知る目盛り
遊ばずに育ったように子を躰け
メーターが血圧上げる音で鳴り
(タクシー値上げ)

鳥取県

清水一保

離農した田とも知らないトンボ舞う
老農の背腰へ秋の風無情
人類のあがき太陽見て沈み
死にたくは無いと聞える秋の蟬

ホノルル市

前山北海

君が代を明治の声で歌い上げ
ボロボロの心夕焼に励まされ
才能と別に買われた実直さ
ささくれた指の不幸を刎ね返し

仙台市

川村映輝

生きている海を見るため汽車に乗る
朝食を待ちかねて居て老いたのし
ルールから脱線もせずに無事定年
無一文になって強盗自首をする

大阪市

西川誓二

秋には秋の風情の花時計

日曜日サービスタイムのコーヒ飲み
我が馬鹿を棚に上げて人に馬鹿
正直に内幕云うて叱られる

岡山県 直原 七面山

悲しみの色は何色濃紫
掃除機の音にも春夏秋の別
突き枚す愛を無情と人は云う
出稼ぎの村出稼ぎの匂いがし

島根県 大森 孝華

信じ合う心にちかう目の動き
人生に生きる坂道旅ひとり
活けおえて対話のつきぬ花ばさみ
人生に誤算があつた落し穴

大阪市 中川 滋雀

夢二も好きピカソも判るコーヒ論
あとさきに落ちる枯葉や訃に急ぐ
ビル街の枯葉はロマンに遠く舞い
齒の抜けた子守唄にも孫は寝る

鳥取県 河村 日満

鳥取新刑務所見学

天国と地獄鉄扉の音軋む
食いはぐれなき囚人の笑い声
刺青を競う受刑の入浴図
出所すぐ戻る男の帰趨性

川西市 戸田 古方

地下街にいて雷を知らなんだ

虫めがねでも字劃不安がり

吠えなんだ犬もねむとおまんねやろ

早よ早よというてる虹が消えそうで

竹原市 時 広 一路

明日のない華麗な舞に酔うて蝶

一步踏み出せば度胸がついてきた

太陽の真下で動く虫である

神様の傑作涙美しい

倉敷市 田 垣 方 大

世渡りのスピード制限内で老い

望まれてふつと打算が横切つた

栗のいが機械が剥いて過疎にする

焼鳥屋一年ぶりの顔と秋

呉市 榎 田 英 詩

合掌はひととき神のふとこころに

明日あるを盲いの老父に教えられ

子へ送る学費見返り期待せず

台風一過恵みの雨と他人は言う

和歌山市 内 芝 としよ

汗知らぬ金は財布に落着けず

つらい過去時効のように笑う皺

順風へふつと取舵忘れかけ

男湯は政治討論時事討論

和泉市 西 岡 洛 醉

嘘一つ重ねて世間狭く居る

一合で酔える果報を持ち続け

たくましさ背にかくして雑魚で生き

伸たがい今日はピエロと成って見る

美祿市 安平次 弘道

焦点をばかし会議を締くくり

これしきを家裁へ頼む意地と意地

稔るもの稔らせ天は誇らない

米過刺カカシはこわい顔で立ち

大田市 藤田 軒太楼

客席の嗚咽しり目に暮下りる

風船の萎みにも似て失意の日

駄馬は駄馬なりに明日への夢を追う

育ちゆく子の肩巾に亡父をみる

鳥取市 岸本 無人

子の為のひとり暮しに立つ噂

蝶が来て青虫敵かと身がまえる

月に窓あけて虫の声も入れ

船酔が陸へあがって喋りだし

藤井寺市 児島 与呂志

父さんに済まない言い訳母にする

確めることを忘れて寝つかれず

俺がまだ生きてる八月十五日

ざるそばの海苔へ天井の扇風機

米子市 小西 雄々

庭園を褒め結構な茶をよばれ

すててここで食うから美味い冷や奴

底抜けに笑ってみたい孤独感

迷惑をされてる方が頭さげ

豊中市 安藤 寿美子

朝顔がしのび込んでる今朝の窓

電車出てから戸締りが気にかかり

結局は棟梁好みに建てられる

この旅の明日を信じて般若経

河内長野市 井上 喜醉

話の種切れたら軒もう聞こえ

うえ見たら切りない相談妻にされ

碎けたら波はさつさと海へ去に

ウツプンを晴らせば終電乗り遅れ

大阪市 河井 庸佑

言うように育たずするように見て育ち

親の身になってもほしい参観日

丹精の割に貧相な菊の花

運動会いやいやしてるのも混じり

平田市 久家 代仕男

恍惚の友を見舞うて気がつまり

登頂した汗が冷えこむ風の中

御城下の月に問うてる稽古三味

釣り竿の喰いが止まって飯にする

米子市 石垣 花子

筆跡の震えに母の老を知り

主役にはなれぬピエロの名人芸

大物が退席宴会らしくなり

それとなく引合わされてからの恋

倉敷市 藤原桜山

善人の弱さ弱点突ききれず

窓際で責められている処世術

子雀を咎めぬ温さ持つ案山子

茶の温さみつけて帰る小さい旅

泉大津市 村上春巳

禁煙のいらだち猫にさとられる

天竜のしぶきは最早秋のもの

篝火に呼吸抜く鶴がいて楽し

天まで行こうと伊吹へ登ってみ

鳥取市 大塚豊生

やわらかい動きで女勝負する

矢印について回れば謎が解け

幸福の実感シャボンの香り抱く

手を触れただけほのぼのと心足る

岸和田市 狭間希久志

血の汗も明日の主役を担う夢

泣く親へゆさぶりかける一人っ子

手鏡を器用にこなすおませな娘

晴れ着を着て鏡の奥に見た心

兵庫県 藤後実男

ライバルの昇格秋の風寒し

カラオケを遠くはなれている音痴

罪捨てに女海辺をつつ走り

二言目爪をせんじて吞めと父

唐津市 新岡回天子

魂の安住俺には行きもどり

保育園孫に礼儀を教えられ

男一匹生きて見せるぞ意地の子に

望郷の山には立てど我家なし

京都市 山本規不風

人の子を育てて苦勞には触れず

長ぐつは楽しい雨を待っている

作業衣を脱げば楽しい絵が描ける

消し壺の中に証拠が入れている

寝屋川市 宮尾あいき

正論を吐いても老の愚痴にされ

敬老日の車内いつもと変らない

おしゃれた朝は白髪がよく目立ち

引っこ抜く朝顔昔へ目をつむる

大阪市 本間満津子

後押しも手引きも貴女ありがとう

岐路に竹ち白杖風に耳澄ます

テレビ見て作った料理よその味

願望が倅せそうな嘘を云う

竹原市 古谷節夫

虫の声男盛りにある不安

以下余白それから本音吐く暮らし

鬼の面かぶって仏に手を合わし

減反へ案山子もにらむ鱗雲

和歌山市

吉野富子

わらつかむ思いへ世辞に付けこまれ

毒舌の男に教養伺えず

決断の迷い占う女坂

母無い童テレビを恨む祖母と住む

羽曳野市

塩満敏

一坪の庭に雑草まで生やし

新幹線富士をさかなに乾杯し

包丁へ心付けする糸作り

のりかえの案内酔った耳できき

西宮市

藤村 女

めぐり逢い残り火あやしく炎え上り

恋文は人に書かせて惚れていず

すねている妻の料理が塩辛い

メッキでも自己満足と云う指輪

羽曳野市

榎本吐来

かすがいにしたこともある子が巢立つ

弁える義理を見送る台所

アルバイトの巫女の手になる盆供養

贅肉の夫を横に見る家計

和歌山市

若宮武雄

十年の月日を敷いた庭の苔

種蒔いておこう命のあすは無い

虫は虫を僕はあのひと恋う夜長

月まるく雲ひとつなく通夜帰り

竹原市

森井菁居

ごさぶりへたじろぐ女の子でよろし

野の花は孤独 僕だつて孤独

祖父のその祖父が庄屋と言う誇り

無職にも詩心募らす秋の雲

大阪市

河野君子

狂わないでくれ九月の風鈴よ

雨降った後の陣地は妻のもの

家族揃うてきょう一日を深くする

炎の彩褪せてきれいな死を想う

京都市

都倉求芽

風鈴が騒いで夕焼け雲褪せる

働ける喜び不眠症など知らず

工事場のお昼故郷訛りの笑い声

喋りたい口が閑な耳探してる

竹原市

山内静水

姫鏡おいて天使のいろづけり

言いたいこと半分言うて羨まれ

叔父の目に兄貴をかばう姉妹

知っている人かも火葬場の煙

八尾市

高橋夕花

秋がきてすこし落ちつく地蔵さま
しぐれてはまた時雨れるか女傘
夫と息子の靴を磨いて羽がない
あげ足を取られてからの失語症

鳥取県 福田保子

トビ職の技を地上で危がり
ものさしで測れぬ夢もある若さ
好奇心あるから恋の使者に発つ
メッキはけてからは仁王の威厳見せ

鳥取県 林露杖

夕映えに何か告げたし掌を合す
太陽の恵みを土竜知らぬだけ
別居して互に判るいいところ
問診に一つの嘘が埋めてある

新宮市 大矢十郎

ああいやな世だと赤ん坊のあくび
此の首も担保となった保険金
猫撫での笑顔見事な罌を持つ
踏台になる善人という身内

下関市 国弘半休門

年寄りて仕事の鬼も医者通い
作業衣でもう出ましたと社長室
カラ出張はつきり言うて叱られる
税金の行違えは知らぬまま納め

鳥根県 谷岡芳枝

一步ずつ誓いの道のきびしさよ
天皇の猫背に歴史重かりし
ふれて見るバラの心が知りたくて
この道が一隅てらす道ならば

和歌山市 西山幸

乳母車母と私の詩がある
折り鶴と眠れぬ夜を分かち合う
野菊咲く母は童女になってゆく
母に降る母にだけ降る秋の雨

和歌山市 浦野和子

外濠を埋めて探りを入れてくる
母と娘で同じわだちを踏む輪廻
又元のリズムに返る秋が好き
うろこ雲九月の海は一人ぼち

八尾市 宮西弥生

水に流そう親子の水はにこらない
背のびした積木の家はすぐつぶれ
山頂の背のびは大志をもっている
ちっぽけなダイヤでもよい女酔う

桜井市 岩本雀踊子

おおざっぱな夫の愛にフト触れる
逆算の過去へ疲れを持った五指
裸ゼニ二級酒なら飲めそうで

大阪市 西森花村

どぶ板の上はねずみにまぶしすぎ

一人居て遺影に言いたいだけでは言
体力がついたか遺言又変える

姫路市 梅給庵 不 醉

今年又古々米となる稲の出来
無念でも相手たたえて僕の負
証だけ残しますよと妊婦服

鳥取市 有 田 とし江

老父が注ぐビールへ怒りが消えてゆき
郷愁をよぶ漁り火へ泣きにきた

前進の一步へ老いの影を見た

枚方市 宮 川 珠 笑

月映す汚染はげしき川の面
喜雨はげし全身濡れてぬれて足る
婦唱夫随息子も嫁に敷かれてる

橿原市 岩 井 本 蔭 棒

霊験があらたかと聞く屋根の反り
包丁を買った男の目がすわり

甲斐性もんとという人もあり離婚歴

香川県 岡 田 拳 法

正義とは弱者の胸の中だけか
判官びいき弱き泣虫たちの歌
平和日本安保タダノリとも言われ

島根県 西 村 早 苗

言い過ぎておんなのうなじ少し揺れ
素晴らしい対話へ市場籠おろす

引き続き晴天曼珠沙華は赤い

七尾市 松 高 秀 峰

家計簿へメガネ上げたり下したり

母さんが玉虫色で丸くゆき

手料理に縁遠くなる稲が来る

大阪府 欄 蘭

酒の肴になってやるから機嫌よし

せっかちで冬でも扇子手放さず

流し灯籠又来年と合掌し

大阪府 天 正 千 梢

吊り橋を渡って青い鳥さがし

老夫婦積木こわして幾山河

産まず女の積木上手に積んでいる

島根県 飯 塚 虎 秋

年毎に雑音さえも遠ざかり

一点を見つめてからの道険し

惜別の遺言悲し走馬灯

笠岡市 松 本 忠 三

生き甲斐は昨日の分をとりもどす

達筆の額が一字も読めぬなり

一滴も飲めず酒屋の親父なり

熊野市 坪 田 冬 花

母は子の大風呂敷へかなしい瞳

イエースの声を小さく電話口

肩書が邪魔良い仕事見あたらす

寝屋川市 江口 度

荷をかつく橋の強度も知らないで

夏バテの舌がさんまの味に逢う

手軽さの大道闊歩する恐さ

大和郡山市 森 田 カズエ

複雑な視線に稲穂みつめられ

洪柿の悲しい声がじんとくる

どんくさい指に悲しい花鉢

東大阪市 齋 藤 三十四

老人会温泉旅行で長生きし

善人の笑いに愛の温みあり

仲裁の杯丸く唄にする

宇部市 平 田 実 男

声だけを聴けば殺せる虫でなし

癌と言う証拠は癌を口にせず

付添いが邪魔になり出す快復期

大阪市 那 須 鎮 彦

蜂蜜に漬けたレモンが美容食

天と地の違いを母にさとされる

水中花水を入れるとダンスする

京都市 松 川 杜 的

この里だけがお祭りと言ふ騒ぎよう (敬老の日)

殊更に三つ目がうれし泉福寺 (洛西観音拝)

樟の葉へ弘法の湯のあったかし

寝屋川市 柴 田 英壬子

愛憎の極は暴力のみ頼り

印が二個要る離婚妻強し

秋の空見せてあげよう敷ぶとん

和歌山市 津 田 与 史

生きている限り残暑に敗けられぬ

生きるだけ生きて今更何を云う

四代目生れる合わす顔探す

倉敷市 齋 藤 通 風

無情ひげ似合う男の仕合わせよ

姑が嫁にたのむは末義妹

老人の息は内科の控え室

松江市 梅 本 登 美 也

髭剃って病人我れを慰める

川巾を唄であやつる渡し舟

ゼロと云う記録にいどむ交通課

大阪市 室 谷 徹 舟

その気配素早く蟬が位置を変え

と云う事にして今日のとこは済み

子供には子供の理屈聞いてやる

大阪市 津 守 柳 伸

はるばると行けば病人元氣すぎ

憶病になった社長の独り言

健康をじつとさせない阿波踊り

大阪市 北 勝 美

ジんクスを洗い落して勝ち進み

熱帯夜ケースの人形も水を乞い
昼に散り夕に咲くのも人生か

和歌山市

福本英子

雑草を活けて女の満ちた顔

曲り角大きく廻って振り向かず

新入りへ社運つぶさに告げられず

和歌山市

坂口公子

そのままでおけば匂っている野花

本当の兎小屋だが灯がぬくい

けがれない瞳に出逢う里の道

橋本市

森脇善太

心底の風には脆い城を持ち

街角の風に仮面を所望され

触れ合いのページに戻し巻き直す

米子市

増田篤

婚約したあとへ美人の写真来る

五分ずつ殖やして日々に試歩たしか

ジーパンの見合い晴れ着の裾をふみ

岡山市

時末一灯

冷し飴売る店がある回り道

ニュータウン整然として無口なり

力ない月が懸って虫鳴かず

鳥取県

金川満春

老夫婦急がぬ旅の楽しい日

空箱のデザイン二度の務する

太陽の明日を信じて人は生き

兵庫県

河原みのる

銭で育ち円であらして方に慣れ

コスモスの走りが秋を告げて来る

辛うじて四〇キロを保って夏

米子市

林瑞枝

子は通夜の涙へしきり気を遣い

陽に焼いた肌美しく旅終る

庭下駄のくぼみに亡父の音が生き

和歌山市

松原寿子

朗報の中に試練の坂がある

ときめきが女の髪の前までも

貴女の胸に女を残す別れざわ

大阪市

藤田頂留子

ふり返りケケケチするなど追れ猫

夏物の見切り来年用に買う

バーゲンのシャツ片袖がのびたまま

米子市

佐伯越子

思慕の鈴亡母の供養の墓で鳴る

空威張り一人舞台で事終り

杖ついた母を迎える里帰り

岸和田市

島崎富志子

年順に恥らい消える旅の風呂

高野山に参り

御仏に亡き子のお守りもたのんで来

線香の煙が邪心を消して行く

大阪市

柳原静香

岸和田市

清野こう

指切りの孫裏切れぬ参観日

同居してバアちゃん甘いものにされ

こおろぎのねぐらと知らず草を引き

藤井寺市

中原比呂志

大東市

土岐トク子

子を叱る般若の面がずれている

当り前の事が新入り疇に落ちぬ

諸権利に埃かぶせて生きている

大阪市

神谷凡九郎

熊野市

西久保苔石

死期を知るそんな才能など要らぬ

人間万才その一秒後が判らない

どの顔も死などちよつとも思てない

玉野市

小谷仙山

松原市

北野久子

良く稼ぐ女針箱など持たず

確証を握ったとびは輪をえがく

桐箱にとじ込め家宝あくびする

出雲市

高橋可保留

信念を曲げずきようまで生きて来る

田園の長閑さゆするブルドーザー

ちくはぐの手拍子賑わう安来節

老いばれたなあと石段足を止め

大阪市

横地雅風

停年の話淋しい顔で聞く

本田恵二朗

立ち止りますをまたかと聞かされる

日稼ぎは明日吹く風にたより過ぎ

乗越しが終着駅でどつと酔い

滝壺の寸前で水あわてない

油汗冷汗生きる道けわし

でっかい夢抱いて宝くじの列

腕白の胸に応えた師の涙

旅行かばん目鏡真先き入れて置き

特急の窓に木曾路の雨けぶり

新田が仲良く並んで宿場町

悲しみの青春息子の心量る

盆踊り今日は御霊も雲を降り

盆踊り心一つに輪が二重

愚直でも一本この世に筋通し

三世代絆をつなぐむつかしき

尽しても嫁の愁いをかいま見る

二十四時耐える編目が又狂い

玉手箱開けないままの世を願ひ

敷かれてる男が靴を磨いて出

お返事をしない子供に育て上げ

濱田久米雄

メモ帖に土産書き足す空の旅
團扇バタバタ風鈴を煽いでみる
太陽がなめまわしてプロポーション

祈られて祈りつづけてそして喜寿
さびしさを隠す強気を哀れとも
泣きに來た土産だとすぐわかり
悪いのはどちらでもない嫁姑
心底を知っているから逆わず

パンダの死歴史はどんな位置に置く
暴走の雷同山脈今動く

拍手なき人生劇場幕となる
書き足らぬドラマ尻無し川になる
虫の声寝酒のコップ下に置く

虫の音のように動いて風を呼ぶ
時計が鳴って男ひとりに暮れやすき
振り向いて浅はかな知恵みせられる
恩人の誤字が淋しくなつてくる
跳び越えた若さを男なつかしむ

道ならぬ恋とは知らぬ阿弥陀さま
人形のへその辺りに何も無い
付け落ちのように達者な日が続き
父の無い子供に靴を揃えられ

川村好郎

尼 緑之助

正本水客

菊 沢 小松園

四捨五入女に都合のよい言葉

伊藤茶仏

手間ひまをかけた模型が喋り出す
はずれ籤みたいポスター雨に濡れ
会場の人気は票につながらず
星屑にロマンを秘める老夫婦
冗談を真に受けてくるお人好し

西尾 栞

友情はすげない仕打たのまれる
友だちが寄ると会の名が出来る
単調なりズムで踊る文化財
虫の声綴る日記に恋進む
夕ざくら我七十の血の騒ぎ

橘 高 薫 風

悼 岡橋宣介氏

かの世にも平湯はあるや詩あるや
手榴弾嘗て握りし掌にレモン
火の恋と氷の恋に天の川
空腹も贅の一つよ名月よ

謹 告

若本多久志氏の健康上の都合で本号は中島生々庵主幹が代選
しました。

その後、多久志氏の経過良好で次号からまた選をする予定です。
ご心配をかけました。

編集部



中島生々庵本社主幹

日川協理事長に就任

日本川柳協会理事長片山雲雀氏、去る七月五日御病氣療養の為、辞任致されましたので、爾来慎重なる協議の結果、東京、大阪所屬の常任理事の万場一致の推薦により、この度当社理事長中島生々庵主幹が、日本川柳協会理事長に就任されました事をお報らせ致します。

右の通り、当社主幹が、日川協理事長という席に就かれました。その重責を痛感致しまして私達同人並びに誌友の皆様方には、何卒今後共一層の御協力を賜りますよう、茲に謹んでお願い申し上げます。

昭和五十四年十月

日川協常任理事

副主幹 西尾 葉

若本多久志著

句文集「続・老いの坂」

好評発売中・頒価千円送料共

序 文・中島生々庵

選 句・菊沢小松園

編 集・若本多久志

本社でお取り次ぎいたします。

発行者 若本多久志

これが川柳の真髄！

川柳全集② 橘高薫風編

「麻生路郎」

定価千円
送料160円

このたび社団法人日本図書館協会の第一四二五回の選定図書に決定されました。

島居百酒著

比島戦線従軍回顧録

「白い歯」 好評発売中

定価千五百円・送料百六十円

発行所(右二著とも)東京都世田谷区三軒茶屋二の十九・振替東京九一三二九一一

構造社出版株式会社

川柳 太平記 (18)

柄井川柳の俳諧素養

東 野 大 八

江戸期の町人文学の特質は、その写実性にある。あるがままの町人の生活万端をいかんなく発揮したところに、人間性の真実を描き出し、その環境、風俗、慣習等が価値づけられたというべきであろう。

町人文学のこうした特質には、高尚な理想の表現もなく、健全な道徳的教訓の力もなく人を魅了する詩的空想もない。しかしながら国文学上、特色ある一時代の文学として世にもてはやされて今日においても高い文学的、資料的価値をもつのは、優秀なその写実性の水準の高さにあるからである。

この写実性という言葉は、外来文学の移入が旺んな明治の中頃に出現したものと見えるが、この写実性は実は上古時代の文芸の中核

で、筆者にいわせれば、この写実性こそ、生粋の日本文学の真髓だと結論づけたい程だ。

この写実性にも質的には二枚がある。社会の秩序、平和が維持され文化の成熟した時代は、人々は現実に満足し欣歌されると、この逆の現実の極端な不満から発想されていくもののそれである。紫式部や世阿弥、浄瑠璃等の芸術的文学論は別格として、最もよく往時の節々の世相に対し、遺憾なくその現実把握を試みた町人の、その時点における率直な感性は写実性を伴うが故に、享乐的、遊戯的傾向を深くする。それは現実批判が好悪に露呈され無力な町人階級の哀歎は、ついには低級卑猥な水準にまで低下する。憂き世を浮世と洒落のめす皮相な諦観こそ、俳諧＝雑俳の底

辺にまで容易に行きつくことにもなる。その底辺が好色本であり洒落本である。

洒落本の内容は通と滑稽であり、好色に結びつくのが会話から生じた口語体である。ごく大まかだが、支考、其角、紀逸の仮名詞は時の世相のいわば、大衆が求めた写実の産物と筆者は考えたい。洒落本はやがて滑稽本を生むのもその過程であり、その滑稽本の代表的作者は式亭三馬だが、彼の滑稽は隠れた恥部を表で暴露し、もの裏側を見ようとするし当然そこにはうがち、皮肉のおかしみが胚胎する。これは三馬独自の発想ではなく時の世相の傾向によるもので、その皮相ぶりは湯垢の如くとるに足りないものも出現する。

さて、七難しい口説が長くなったが、雑俳の蔑視される種々の短詞型による遊戯性は、当然、わび、さびの細見からする蕉門にとつては到底評すべからざる単俗性の極みということになる。川柳は、いうなれば雑俳畑の三馬流といえはいいえるのではないか。万句合や柳橙が、雑俳本のジャンルをくぐり抜けて永年世に罷り通り現代的な価値を帯びる結果を呼んだのも、いつの世に変わらぬ大衆の写実性の真によるもので、狂句への傾斜は、その大衆性の時代相の推移による。

とにかく初代川柳は、享保の治と称される

泰平期から、天変地異、それに伴う為政者側のめまぐるしい権力推移の中に、戯作狂歌氾濫のルツボからよく耐乏して柳樽刊行を維持したのも、彼を取りまく初代川柳ブレーンの力量にあつたことはいうまでもあるまい。

初代川柳の俳諧の世界は、彼自身の俳諧への関心とその性格に大衆社会のエリートな名主職を背景に展開される。

初代川柳の俳歴は、大島蓼太に終る。

蓼太は信州伊奈郡大島の出で本名吉川。早くから江戸に出て、俳諧で身を立てるべく決意、二十三歳の時、雪中庵吏登に師事し、その才覚と天分を師に認められ、三十歳でその雪中庵を継いだ。(「雪中庵伝灯記」) 歿年は天明七年(一七八七)で享年七十歳。

彼の世代には蕪村・暁台・白雄という所謂中興俳諧の諸家も健在であつた。雪中庵三世を名乗つた三十歳の蓼太は、江戸俳壇制庄の野心に燃え、葛飾派の素丸らが祇空指導で出した「五色墨」に注目、その素丸を語つて、「統五色墨」を出し、江戸座宗匠連が出した「延享二十歌仙」(延享二年刊)を徹底的に批判した。蓼太は蕪村・太祇のような純粋な芸術家肌の人物ではなく、むしろ俳諧事業家といった性格の持主で、門下三千人といわれた。

雪中庵にとつての当面のライバルは江戸座である。蓼太の肚の内は、江戸座を懐柔してわが俳門を拡大すべく、素丸を利用したのである。二十歌仙について彼は「雪おろし」(宝暦元年刊)を出し、親支考派を明確にし伊勢・美濃派を抱き込み、「俳諧無門関」(宝暦十二年刊)で落ち目の江戸座の大半をなし崩しに、彼の門中に引き入れた。初代川柳もその中に混つていた。蓼太から十歳も年下の初代川柳はまだ三十歳に足らず、部屋住みの身であり、雪中庵の俳諧も研修しておく必要を認めていたとみえる。

其角の江戸座ムードの仮名詩に共鳴して初代川柳は、まずは蓼太門に入り、彼を師として認めた形だが、あくまでその本意は、細身となつた江戸座中に一応は籍をおいていたわけである。彼がやがて蓼太の雪中庵に見切りをつける形となるのもこの因縁による。

蓼太は雪中庵のモットーに蕉風を掲げ、芭蕉のからみみの平俗化をネラつた。初代川柳の蓼太門の魅力はここにあつたようである。しかし蓼太は、芭蕉晩年の古淡な軽味の、沈潜した深味のはからいに較べ、その精神とはほど遠い技巧に終始していた。

——むつとして戻れば庭に柳かな 蓼太

——世の中は三日見ぬ間の桜かな 蓼太

「蓼太句集」に収録されている句であるが、いずれも人口に膾炙されながら、作者名が伴っていない。いわば俗受けのする句で「むつとした」「世の中は」の、両句の上五は、むしろ川柳風である。柳も桜も、その風情は上五で影が薄くなり、もはや蕉風の味はない。

若い初代川柳は、この「はからい」を見脱さなかつた。随つて彼の句は、つねに雪門座中の物儀をかもし、絶えず他の宗匠の批判の座にさらされ、ついには白眼視されるに至る。

かくてある年の秋の観月句会の席上、一座から正面切つて初代川柳への非難の声が上り師の蓼太もやむなく本人をたしなめた処、莞爾とした柄井川柳はつきの句を書き流した。

——めつちの蛙桂馬に飛んで行き 川柳

この一句を最後の捨ゼリフに蓼太門を去つた彼は、この自嘲句を最後に、雪中庵門も江戸座にも二度と還らなかつた。往時、諸流の俳門は十を下らなかつたが、若い三十歳台初めの柄井川柳は、ここで独自の前句付の世界を拓き、ついに四十歳の万句合で無名庵を創設するのである。三十八歳で名主職についたその身分保証も効率的に寄与したことはいうまでもない。

俳句研究 五篇 留廿五 柳回 詠

— (二六丁) —



清 博 美

475 切遊び吾妻女郎に京男

八木―はつきりしない句である。東男に京女という言葉があるが、その「もじり」であろうか。

青木―「切遊び」はショート・タイム。切見世の女の方の鼻っばしが遊客よりも強いのを俚諺を逆さまにしてかけた句。

室山―賛。京都人は怪書家ということに川柳ではなっている。

昼遊び東女郎に京男

一五二・38

岡田―室山説賛。江戸の切遊びには深川の岡場所がある。江戸の大商家には関西からの雇人多く、商家に勤めているのだから、商用で外出した折りの昼遊び、主として深川が利用された。それを詠んだ句。

476 小豆は公卿大角豆勇者也

八木―これもはつきりしない。よろしくお願ひします。

青木―不明。単なる見立のようにも思われるが―。

西原―赤いアズキと白いササゲで、平家と源氏のみたて。

室山―「小豆」は大納言、「豆」は(坂田)金時(金時小豆)ではなからうか。「小豆」

が人名(固有名詞)ではないので、いささか不安であるが……。 「大豆」ということにはだわるのなら、

豆を煮た椀原焚付る

一〇六・29

豆殻で豆を煮詰る衣川

一五三・27

の源義経となるが、この方はどうも考え過ぎ

八木 敬一・紀内 恒久・青木 迷朗
西原 亮・鈴木 黄・室山 三柳
入江 勇・清 博美・岡田 甫

の感がある。その他「虎豆」というのもあるが、「勇者」となるか疑問。

入江―室山氏説の通り、大角豆に金時ササゲあり。

岡田―「大角豆」はササゲと訓む。このことに触れる必要あり。そうすれば、入江氏のいう「金時ササゲ」がはつきりするし、適解となる。また「小豆」の大納言は室山説の通り。

477 棒の手を見せて和尚ハ馳走する

八木―「棒の手」、これは元来棒術の手であるが、ここでは麵棒の手さばき位の意味に使っている。ソバを伸ばす麵棒である。

本句は、深大寺を詠んだものである。

青木―中七「和尚」を重視すれば、道光庵のようにも思われる。

西原一贊。「奥の手」でなく「棒の手」が
おもしろい。

入江一寺は泥棒に狙われやすいので、棒術を
習得する者がいた。これを棒の手ともいう。

ここは、それにソバを打つ麵棒を利かす。和
尚が日頃たんれんした棒術の手並みを見せて
客にそばを打って馳走する。道光庵・深大寺
そばが有名であったが、本句はその何れとも
決め手がないので一般に寺と解する。

清一入江氏説に賛。当時何処の寺にもあつた
風景である。

岡田一同。寺では精進料理だから、ソバを打
つことが多かった。

(二十七丁)

478 ひいきのさたとして団扇嫁ハかひ

紀内一役者の似顔絵の団扇。粗末なものであ
つたらしいが、現在のプロマイドのように若
い女性にもはやされたであろうことが想像
できる。また市井の女性としては、この位が
せめてひいき役者への声援だったのであろう。
嫁遠慮夫へかくすひいきの名

一〇七・40

西原一贊。

夏の手土産いい役者いい女郎 二九・14

岡田一同。但し、礎稿に粗末なものであつた
らしいが……とあれど、若いころ古道具屋で
見たのは、錦絵の多色摺で、美麗なものでし
た。

479 夫レ見たかとして太公盆を出し

紀内一「覆水盆に還らず」の故事。

真直な針で釣りをしているだけで何もせぬ
太公にあいそをつかし、去つた女房、その後
周王にとりたてられたことを聞き、復縁を追
りに来た時、太公は盆の水をこぼし、「これ
を見よ」といつて諫めたという。

唐やうの三下り半盆の水 九〇・9
後悔は身にしみくと盆の水

六二・15

西原一贊。「とつて」とは何の事であらう。

〈取つて〉は安っぽいし、〈言つて〉の誤り
であらうか。

鈴木一贊。落花枝に返らず破鏡再び照さず
(毛吹草)。しかしまた、

ふく水盆にかへり内々で入レ 二二・10
入江一同。「とつて」は、西原氏の言われる
ように「といつて」の略語。

岡田一同。

480 子傳りめをのがすなゑと長竿場

紀内一「子傳り」が不明。

青木一本篇の、「虎髭のぶつたくりめと長竿
場」(二五・6)で、西原氏のご明解の類句

『三国志』長坂橋の巻。西原氏、主題句に

「阿斗(支徳のむすこ)をふところにした趙
雲が長坂坡へ」と注をされた。

「子傳り」は、名著本には「子守」とあるか
ら、「こもり」と読むのか。

西原一贊。『三国志』では「長坂坡」で有名
である。

室山一同。青木・西原説のごとく、「子守り」
は趙雲をふまえて、鉄火場をのぞいた子守娘
をいつている。また、その逆もいえよう。

岡田一贊。

481 サア登るべいと頼義御かいぢん

紀内一陸奥守、鎮守府將軍源頼義。

前九年の役を平定し、京へ帰る時、長年の
奥州暮しに、言葉も奥州言葉になつたであ
らうとの句作。

かいぢんの時ハおふしうことは也

二二・6

入江一贊。要するに田舎ことばになつて京へ
凱旋したという趣向句。

岡田一同。

一人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

菊 沢 小松園

むらさきのささやき桔梗露にぬれ

藤村 メ女

文学少女のような句の漂うこの句がこの作者をよく知って居るが故に嬉しくもあり又不思議にも思ふ。それだけにおやと思ふこと切きり、それだけに意外な発見でもある。

川ある日ひたひた流れねばならず

水粉 千翁

興亡盛衰は人の世だけのものならず、少し長い目で見れば自然の移り変りにもそれ以上のものがある。ひたひた流れる川に曾ての豊かだった流れを誰が想像しよう。下五のねばならぬ処に作者の揺がぬ知性を見る。

朝帰り犬も細目をあげただけ

高橋千万子

此の風景を家族中の冷たい視線を大に使って表現した処なかなかの老練、細かい観察を軽く扱って成功している。

死亡欄俺より老けている安堵

島居 百酒

人間の弱さが思わぬ処に出る。年輪を重ねるといつも死と対決している。死亡欄見ても真先に年齢を見る、そしてそれが少しでも上なれば安堵する。別に関係もない人ながらも妙に死亡年齢だけが気になるのも不思議だ。

ひと言のあれから遠い人となり

江城 修史

迂闊なただ一と言がその人の胸に突き刺さって友情がたつく。あれからもう何年目かあの人も遠い人になって終つた。

馬鹿になる事がこんなにむつかしい

嘉数千代香

賢くなる努力は教つても、馬鹿になる事は誰にも教わらぬ業とらしくなく本当に涉る馬鹿はなかなか難かしい。複雑多岐に渉る人生には時に阿呆にもならねばならない人生行路のむつかしさだろうか。

搾るだけ搾れと牛は目をつむり

工藤 甲吉

諦観の生活にある種の尊さ諦め切つた姿は一脈仏に通じ菩提にも通う。人間中心の観点からは勝手は許されても平等無碍の大道から罪深い行為になる。牛は何んにも言わないがけれどもである。

俗名の他に文字なしさぎよし

香川 酔々

此の世に生きて居る証しが俗名なら是れ以上の名があろう苦もないのに何を苦んで外の名を欲しがるのか、自分の限界を見せたが足掻きなのか、何れにしても俗名一本、何と

すつきりした鮮やかな正直さだろう。

ガス一発面会禁止の札がとれ

若林 草石

この一発には喜びがある。医師も本人も待つて居た一発である。経過を知らず狼狽である。何と明るい朗報であろう医師である草石先生なればこそ詠めたユーモラスな句である。俵せだからいきさを語りつぐ

谷岡 芳枝

平和日本、静かな日常だから、戦争物語も話題として浮び上る。批判も反対も何の抵抗も許されなかつた暗闇の戦時を体験した者に取つて平和は尊い。だがそれを今の若者達は知らない、知ろうとはしない。

文人形女の業を背で哭く

浦野 和子

文楽の世界に涙は付きもの、声をおしんで背で哭く、洗練されたポーズは文楽ならではのものである。十代の若い頃からその美しさに私は見飽かぬ経験がある。誇張された女の業が美しいエメラルドの輝きとなって観衆の上に降り濯ぐ。憂きも悲しみも皆文楽は美化して終まう。不思議な世界だ。

翔んで翔んで女は生活の垢見せぬ

宮西 弥生

奔放な女の世界に、少々の無理や背伸びは許される。そして、多少の後ろめたさや秘めごとは、陽の目を見せず万事上手にやっつけている。それこそ現代に生きる許された限界と言えないこともない。独身女性の賢さがよく出ている。

秀句鑑賞

— 前月号から —

三人の目

鎌を持つ掌に政治輪疎ましく

中島 彩平

もの芽吹く春、収穫の秋、そんなよろこびを知る作者に、政治論などどこ吹く風「何々をして平和」と言うような句をよく見かけるが、この句こそ平和そのもの、作者の人格の良さが窺える。

一对の万灯にして父母逢わせ

高杉 千歩

ご両親のどちらかが早く亡くなられて、そして残された方もお亡くなりになってしまった今、夫婦としてのご両親への思いやりを、一对の万灯に託された優しさと祈りを感じるのです。

妻の眼に後ろ姿が疲れてる

小林鯛牙子

夫婦のあり方について、マスコミでも取上げてとやかく言われているこの頃、苦勞を共に重ねてこられたご夫婦の夫への愛情が「後

ろ姿」でよく現わされていて、ほのぼのとした夫婦の良さを感じました。(小出 智子)

下駄箱に下駄の肩身のせまいこと

桑田 静子

この句、ずばり人間社会にも繋がるものを感じる。その昔の華やかな下駄に変わって、いまや靴で占められた下駄箱の隅に、そっと、老母の下駄は遠慮けである。下駄は老母そのものなのである。庇を貸して母屋取られる、の諺にも一脈通じるところがあり、ちよつびり風刺の効いたところなど見逃せない。

悪玉の力が欲しい時もある

竹内花代子

世が世なれば、良識ある善人こそ、こんな気持ちにもなる。現代社会の大きなうねりの中で、巻こまれまいとする善玉の叫びこそ尊いものと思ふ。

アイシャドーの巫女を神様侍べらせる

池田 半仙

神に仕える巫女も、しゃれつゝ気まんまんの陽気な乙女たちである。鎮守の森の神様も、どう粧うが、より美しい巫女が好みにきまっている。と、言うより、この世相に従って行かねば、実入りに差しつかえろと思召し給う。ユーモアが溢れている。(河野 君子)

今年も編集部の人二点と筆をそろえたが、ぼくがチェックした句がやはり多かった。

二年ほど前だったか、下五の常套語を十句ほどならべて後記へ書いたことがある。つま

り「……かも知れず」や「……恵びれず」などだった。最近では「……負け犬」や「……負けている」または「……だつてある」というのに人氣が集まっているようだ。——さて、こちらはオリジナルでいこう。

この蟻がなんて五階の砂糖知る

桑原 洵治

いろんなことを想像させる楽しい句だ。犯人捜しの金田一センセなら、どんな鑑賞をするだろうか。まずわれわれなら、蟻の生活力の旺盛さを教えられることになる。ところでこの句のポイントは「五階」ということになるだろう。三十階では荒唐無稽になる。かと言って二階では蟻の威力を誇張できない。作者が五階に住む住まないは別にして、五階あたりに真实性がこもる。

乗り心地試してみたい霊柩車

中谷 利美

作者は二年輩の方と見うける。中七の試してみたいで想像できるが、河井庸佑(本社同人)に嫁いでいる長女の幼少のころ、霊柩車を見て「あんな綺麗なタクシーに乗りたい」とタタをこねられ困ったことがある。

捨てておけぬ話へ腰が浮いてくる

中森葉土人

多くの若い頃なら、喧嘩の助っ人だが、作者はそんな方ではない。「よっしや、任かしとき」と、いかにも世話好きの人情家か目に浮んでほほえましい。(不二田一三夫)

水煙抄

川村好郎選

風鈴が敏感 初秋の風をきく

竹原市 古田 寛子

哀しみはのりこえるものと白い雲

彼岸花 亡母さん私も母になる

幸せのこんな形もありますの
米をとぐあいだ女の思うこと

大阪市 西 出 英子

人恋し人煩わし山路ゆく

愛しさは四季花それぞれ自己主張

いそいそと家事くり返す幸もある
まっすぐに生きて度量を狭く居る
髪型をかえるも夫に問うてみる

八尾市 田 中 紀美代

妥協する早さで夫婦仲が良い

好きだから逆ろうているとは知らず
ノクターン相手はとうに寝てしまい
省エネのひびかぬとこに長寿村

機械化で駅員ロボットめいてくる

不運にもめげず石橋まだ叩き

長崎県 岩 崎 和子

無意識に目と目が出合う嫁姑

追いかけてくれぬ男にある未練
幸せが怖い時分もあった過去
それとなく他人の嫁をほめる姑

福山市 桑 田 静子

呑み込んだ涙もやがて明日の糧

うれしさを毀さぬように千鳥掛け
アイロンの目盛り化繊に気乗らぬ日
剪定にしたたる汗の盆休み

大和高田市 岸 本 豊平次

拭ったのは汗か涙か甲子園

親までもつんば棧敷ですすむ愛
中座した後の成り行き気にかかり
そつがなく生きて一本筋がない

島根県 木村 はじめ

自動ドアだけは私に素直です
旅なれば妻の手を引く雪の道

旅の宿ビールやっぱり妻が酌ぎ
たこつばに浜木綿活けて海女の宿

八尾市 高杉 千歩

永遠に生きつぐ野草花持たず

離島女ひとり呑み込みし
去り難く荒波くぐる石拾う

唐津市 桑原 掬治

見に来たか見せに来たのか参観日

なんとまあ脱税額は億単位
吠えるだけの犬と大臣くらべてみ

竹原市 古田 鈍舟

窮鼠猫かむ敗軍の将となる

強がりも後姿が本音かも
たまに逢う人だからなつかしい

諫早市 江副 二牛

大物の影で小物がよく動き

嫁ぐ娘の挨拶派先に出る
借金糸口までの無駄話

和歌山市 堀端 三男

幕下りて親子の顔となる役者

夕立に弾むころをじらされる
未来図を描く余白だけ残しとき

米子市 野坂 なみ

民宿の旅ホテルより性に合い
顔見世に胸の遺影と語り合い

家系図の誇りを抱いて寡婦の道

大阪市 小谷 清女

ささやかなリズムに今日もつつがなし

寝姿がどうあろうとも明日の子等
傷付けぬ言葉を撰っている疲れ
大阪市 田口 なりこ

たわ言を繰返す歳に何時かなり

霜の朝冬の匂いが通り過ぎ
初霜に義母の持病が気遣かわれ
米子市 桑原 伊都

暑気払い梅酒に酔うた妻の色

メッキでも生涯指に光らせる
みどり児の無心の笑顔に幸を知る
米子市 雑賀 美世
(野口美世改)

物価急騰保険嫌いに拍車かけ

メッキせぬ素肌の誇り守り抜き
朝の陽を拝んで老いの意欲わき
熊本市 有働 芳仙

総選挙聖徳太子目が回り

呼び合って聞える距離に老夫婦
二、三日嫁より遅く起きてやり
名古屋市 越村 枯梢

団欒に明治の父は独り酌む
背伸びして中産意識の兎小屋
遅れ時計に歩巾合わせて老の日日

今治市 新居田 胡頼子

腰推間板ヘルニアで入院

セツトしたギブス冷たく腰を責め
天井と対峙がまんのコルセツト
退院の窓に別れの深呼吸

兵庫県 中田 白 李

指先のしびれは孫にも洩らされず
老父母の花道末ッ子のめでたい日
人間に欺まされ咲いた花が売れ

豊中市 満 仲 きく子

海鳴りが知ってる夏のエピソード
強がり言うてて頼りにしてる仲
御苦労さんそのひと言も添え夕餉

羽曳野市 麻 野 秋 畝

ごきぶりを打ちそこねしも老いにされ
億の金動く世に選る特価品
虫の音につられて残り蚊に刺され

吹田市 藤 原 世史春

安い方買うのに犬の名が出され
家計簿がローンと戦う二十年
頭髪のこと禁句の六十路なり

広島市 すが かつこ

しつけ糸だらけで妻に飼われるや
空想のネジを巻きたい昼の酒

富田林市 中 村 優

お別れへ皆善人の顔で立ち
悪い方へ脚色したい人の口

出雲市 園 山 多賀子

方便の嘘許される時もあり
干潮になじめぬ貝の身を投げる

出雲市 板 垣 夢 酔

墓土地が買えず長生きさせられる
コスモスの乱れは狼藉されたこと

島根県 星 野 侑 正

愛の鞭しよせんは叱っただけのこと
栄転の蔭で女が一人泣き

泉佐野市 大 工 静 子

鎌がわりに使う指をあわれとも
稲穂さえ東の方へおじぎして

鳥取県 羽津川 公 乃

傷心の旅をアベック刺戟する
枯れた手に記念の指輪が抜けそつで

高槻市 竹 内 花代子

民謡に乗って明子が翔んでいる
装いを見せる女に秋がある

熊野市 上垣内 清 利

妻や子が居るから男丸くなる

強国は核で脅して平和説き

大阪市 堀口 欣一

岡山県 池田 半仙

ひとときの幸せ画廊の昼にいる
パセリーを鉢で育てて妻の知恵

熊本市 北川 一進

悲しみも我が事ならば割り切れず
子等巣立 肩が軽いと云う他人

兵庫県 野々口 ゆう也

同居してチャンネル迄も気を配り
少うしは無理もプランに組立てる

橿原市 西本 保夫

冷戦もとけたか朝の大あくび
ついて来る妻はあきらめ貌をして

岸和田市 原 サヨ子

まだボクの知恵借りに来る会議室
まだボくに丁寧なもの言う電話口

鳥取市 中森 葉士人

はい上る意志の強さを子に願ひ
機上より見下す下界平和です

和歌山県 天満 三千代

震災日記憶に遠く老母在す
おじさんと呼ぶから返事ためらわせ

旭川市 朝倉 大柏

流行になじめぬ白髪すきあげる
観音講心は修羅の鈴をふる

米子市 菅井 未知

よそ目にはロマン坐礁で聞く霧笛
賠償金妬いてるわれにふと気付き

新宮市 辻 式

バーゲンのスーツ娘に見やぶられ
残さずに食べておくれ離乳食

尼崎市 中谷 利美

沈黙へそつと茶を出す妻がいる
幸せはあなたまかせの蔦かずら

松江市 竹内 寿美

親の目に似たもの夫婦のいう安堵
誰にでも好かれる妻で物足らず

羽咋市 三宅 ろ亭

酒に逃げる男羨しと思ひ
又一人友の訃を聞く秋の風

東子市 小山 悠泉

出る杭は打たれるものよ村総会
勿体ぶる仕草さ儲けのためならば

浜田市 佐々木 裕

金儲けの近道聞けば金がいり
負け犬の心さびしい雨の音

頃合いを図り三選表明す
さわやかな秋にうなずく人と稲

高槻市 大垣 たもつ

左遷とは思いたくない定期券
昼酒の左手みれば指がない

大阪市 林 ひろこ

選挙戦足より先に動く金

暗れ姿自分の時代と比較する

尾鷲市 渡辺 伊津志

渦潮に向って歩く律気者

何気ない言葉で知った思いやり

羽島市 時田 誠一

問うてみた自分の心揺れている

僕に似た阿呆もいる浮世です

寝屋川市 小林 鯛牙子

代議士を嘘発見器にかけなさい

未来像描き直した仲である

島根県 堀江 百代

なにげなく投げた小石の輪をひろげ

巡り合い大事にしたいペンを取る

出雲市 吉岡 きみえ

サイコロを持たぬ人生もまたたのし

秋風に掃除のこの手よく動き

羽島市 伊藤 静枝

拒絶する覚悟の保険に乗せられて

老のふりさけるつもりに老の影

東広島市 石井 さわ子

街の子へ聞かせてやり度い蟬しぐれ

衝立の区切りの中で箸を割り

広島市 光井 みほ

鍵いらぬ里の暮しに和む風

心地よい目覚めを呉れて秋はそこ

西宮市 山田 喜代子

ゴルフ場勿体ないなどみる緑

がんこさが増して白髪も多くなり

今治市 和田 宏

造船の町街路樹のセレモニ

釣書になかった父の勇み足

倉敷市 大森 登竜

水引の黒でこの世の義理がすみ

水溜りチャンと知ってる千鳥足

川西市 氏林 洋敏

混浴の夢捨て切れず秘境旅

トイレする場所がないから秘境なり

岡山市 清水 金太郎

嫁探し戦友会へも期待かけ

小遣いで子が喜こんだ頃がよし

唐津市 浜本 久仁於

スクラムを組む鉢巻は白すぎる

暗闇に描く心の虹はまんまるい

寝屋川市 立床 晴風

とつときの御世辞を云うて借り来る

事なかれ主義でお世辞を忘れない

東大阪市 三宅哲夫
多党化が政局不安に輪をかける
秋の風ことしや格別冷めたそぞう

富田林市 大道美乙女
恋という魔力母捨て故郷も捨て
生理休暇とつて二泊のプラン練る

大阪市 藤森小雅子
七転八起齡は耳順を既に越え
腕組んで佇ば女の妖婦めき

岡山市 砂田静佳
青竹も定年らしく枯れはじめ
テレビ終り虫のコーラス月さやか

島根県 山本博也
釣り竿の先端秋が動かない
反抗の言葉へ眼鏡拭き直す

岡山市 花田たけ志
良心のかしゃくが鏡を遠ざける
一畝へ帰る子を待つ種をまく

山口県 高崎雀声
美しい夢は枕を抱いて覚め
御祈禱と思つて保険かけすてる

米子市 三戸静絵
香川県 田井教之
焼き尽すように蟬鳴く敗戦忌

倉敷市 中島彩平
いい月夜泣きに出た顔恥しく

鳥取県 和井観洋
初恋の記憶がくすぶる焼却炉

愛知県 池田香珠夫
豪邸を茂るにまかせ寡婦ひとり

今治市 矢野佳雲
秋風へ散る気になった桐の業

米子市 青戸美佐
故郷はるか思い出させる梨の味

岡山市 井上柳五郎
きついこと柔和な顔で吐き出され

寝屋川市 福富隆子
年金の八百円増どう使う

大阪市 平井露芳
省エネをよそにじゃんじゃん車売れ

大阪市 岡田ふみ
お互いを案じあつてる老夫婦

尼崎市 中辻千子
盆客が帰つて一息役がすみ

八戸市 島田昭治
父逝きし歳を四つも過ぎたのに

大阪市 本多俊子
手作りの花仏壇へ惜しげなく

出雲市 石倉芙佐子
人妻の心に夾竹桃は燃え

島根県 角耕草
橋ができ渡ししの詩がまた消える

自慰で済む話の辻褃軽く言う

岡山県 岩道博友

母の日の感謝改めては云わず

新潟県 高野不二

条件がよ過ぎ縁談不安がり

島根県 山根峰雪

枝豆の百円の差を確かめる

京都市 松川芳子

暖房を離れる順を見る社長

鳥取市 武田帆雀

大正に郷愁があるラムネ飲む

大阪市 白石潔

月蝕も解けて見事な雨後の月

唐津市 田口虹汀

己が身を裂かれうなぎ肝で生き

唐津市 山下勝一

老いらくや秋の日差しが寂しかり

唐津市 玉置嵌

荷物持つ駅のホームが長すぎる

唐津市 浜本義美

川柳塔仰いでばかりいるわたし

島根県 松本文子

合わす掌へ心の旅の歩が軋み

岡山市 串田句味地

出稼ぎは子供宛に便りする

青森県 五十嵐操史

一日に短長が有って面白い

大阪市 岩田八文銭

故郷からの電話とわかるアクセント

枚方市 栗林光夫

★

住み古りて袋小路に名を知られ

上田市 金子呑風

帰省して父の浴衣が短かすぎ

城下町土塀の中に二代住む
カラオケは酔どれの声時間過ぎ

名古屋市 鈴木可香

虫歯ずきずき無性と腹が立つてくる

ぶどう狩りの季節に惚れる甲州路

片親ではどうもと面接匂わせる
青年の愛はぶつきらぼうでよし

大洲市 米沢暁明

十万の瞳の中の隠し球

ともかくも寄付することで帰しとく
はるばると母も来ました甲子園

本店はクーラー支所は扇風機

岐阜市 市川鱗魚

錆させてなるか夫婦の鎖だよ

本心と違うおわびの火打石

定着の椅子に旗ふる齡もすぎ

ロッカーに詰める嘘なら楽しめる
カマキリのポーズ落ち目が笑えない

書評・島根県川柳史

橘 高 薫 風

山根巢人著「島根県川柳史」が九月一日島根県川柳協会から発行になった。柴田午朗氏の序文に「この川柳史に登場する川柳作家の数は一千名に及ぶ」とあるが、五編九章百二十名に分けられた川柳の歴史は一部島根だけに止まっただけではない労作である。

明治三十七年、村穂珍馬氏が日本新聞の井上剣花坊選「新題柳樽」に投句をした後、笑覚坊、苦論坊、恋笑坊、拳骨坊といった同志を集めて乱坊会を創立、後、それらの人達が稲馬、炎馬、トン馬と名を替えて弥次馬会と改めた大正四年頃の創生期から、戦争を経て昭和五十二年六月に松江番傘の五十周年、昭和五十二年六月に、いずも川柳会の五十周年大会を盛大に開催した現代に至る経緯が、多くの柳人の作品を時代に応じて掲出しながら記録されている。次に本社関係の項目を紹介してみる。

先ず大正十五年、麻生路郎の川柳雑誌松江支部の初代幹事として支部創設に力を尽した松丘町二について興味深い考察をしておられる。旧制松江高等学校に奉職した町二は同校の水木教授の高遇を得て川柳の道に入ったのだが、入門のより処として「川柳雑誌」を選んだ理由について、岡田三面子・森東魚・蛭子省二・今井卯木諸氏らによる古川柳の研究にも傾倒して了解を得た路郎が、国文学者水木教授の好意と理解を得たことだろうと類推されている。剣花坊一、路郎一、町二の線は、剣花坊一、路郎一、水木教授一、町二ということであり、これが川柳雑誌松江支部の発足なのであった。大正十五年十月、藤川郡高松村（現出雲市高松町）の尾添雷相と伊藤藤三の助（現尼緑之助）によつて支部れた「たかせ会」は昭和二年川柳雑誌「川柳」支所となつた。後年、緑之助は当時を回想して「川柳雑誌社のその新鮮な句風に強うたれたことから、それまでは軽べつしていた川柳一辺倒に没入することになり、以後今日に続いている」と心境を述べている。以後五十年間の倦まぬ尽力は、島根県川柳界を今日に育てたのである。その偉大さは、県川柳協会副理事長の肩書や昭和四十八年五月、日御崎に建てられた「灯台の夕陽神話を抱きよせる」の句碑に数等まさるものであろう。

何れもかもしつけたようにバラ散りぬ。緑之助の頃の句である。

大正十五年創立の川柳松江支部、昭和三年いずも吟社から「神有月」発刊（これは第四号で昭和刊となるが「川柳いずも」の原点となる）昭和八年には川柳八束支部が発足した。戦中吟も多数掲載され前線・銃後に亘る。弾丸へ顔を伏せれば青い草北支園山勤一郎慰問袋は白いベッドでひらいたか。広江天痴人国難へわが悲しみは露に似る。笹本 英子 戦後いち早く、勝谷山川児・本庄快哉・山根巢人の三名が広江天痴人居を訪れ川柳誌を出そうと誓い合った。昭和二十一年一月四日のことで、すぐさま呼ばれた尼緑之助・安達尚民・梶谷竜人・岡崎祥月・恒松町虹・本庄啓三を併せ十名の創立同人で戦後初の川柳誌「柳城」が発刊された。物資不足時の苦難のエピソードも多く、やがて二十三年一月休刊となる。島根県で戦後最初の句会は川柳出雲支部で昭和二十年十一月出雲公会堂であった。翌二十一年十一月には麻生路郎、橋本緑雨を迎えて支部創立二十周年大会を開催した。翌々二十三年には支部の別称「大地吟社」を「出雲川柳会」と改め、会報「いずも」を発刊、同誌はこの十一月百五十号に達する。

昭和二十四年「むらくも」が、昭和五十年には大田川柳会、仁多川柳会が、翌五十一年には平田川柳会が相次いで発足した。これらは本社に関りの深い会であるが、他の記事、例えば雑誌の中の古川柳研究者、女性作家の横顔、作品、神戸柳界と島根、マスコミ柳壇、句集・句碑、物故柳人、川柳年表等克明な記述に編者と発行者の情熱をひしひしと感じたのである。発刊を心からお祝い申し上げる。

▼柴田午朗句集「鶴の木」出版祝賀川柳大会
日時11月3日（祝）10時開場・場所松江市末次本町（安道湖畔）祝辞に本社「尼緑之助」ほか。題と選者／善人・津川紫吻／底・土居哲秋／水・森中恵美子／美しい・田中好啓／笛・時美新子／夢・橘高薫風／絵・定金冬／人間・岩井三窓・会費二千円（句集「鶴の木」発表誌呈）祝宴費三千円（午朗茶筆色紙呈）宿泊四千円（一泊朝食付）主催・島根県川柳協会。

川柳と人形劇と(1)

——随想風に

山村祐

今年七月下旬、津山市教育委員会の主催で川柳大会が催されたが、その前夜祭として「川柳と人形劇」という座談会を開くから、という招きを受けた。あとで知ったことだが津山市の教育委員会には「やっこ」という職場人形劇のサークルがあり、また前原勝郎氏などすぐれた若い現代川柳人が職員の間になに居られるのである。そうしたことが、一見奇妙な取合せにみえる。この座談会企画のきっかけとなったのであろう。

津山市は中国山系の盆地にある小都市なのに、文化的伝統の深い土地柄である。私は初めての訪問だが、この吉備地方は北九州と大和地方と並んで、三大古墳群の所在地であることに、かねてから深く興味を惹かれていた。この地方に踞居していた古代の大豪族たちが大陸文化を逸早く受入れて、独自の文化圏を創りあげていた。例えば蝙蝠塚古墳の怪異な相貌の時代から更にはるかに遡って、弥生時

代の住居跡に行つとき、そこから現代へ流れ続けた歲月のはるけさに心うたれるのであった。更に狩猟採集時代の縄文人たちにとつて弥生人たちの農耕文化、大陸からもたらされた新文化が、いかに驚異的で、新鮮なものであったか、についても、思いを馳せないではいられないのである。

話は変わるが、私は一九五〇年代末から六〇年代末までの約一〇年間、人形劇の研究などでヨーロッパや東南アジアを駆け歩いた。前後七、八カ月に亘るそれらの外国旅行で得たものは何であつたか、と振り返ってみる必要がある。確かにヨーロッパの人形劇の新鮮さや、アジアの古い文化の数々に心をうばわれる思いはあつた。しかし最も大きな収穫と思われたのは、日本の国外へ出て、日本の文化と日本人の姿とを客観的に眺める機会を得たことであつた。

コップの中から眺めただけではコップの全

体像はなかなか掴みにくい。例えば戦前までの皇国史観による国史学者たちの、古事記や日本書紀などの日本の文献のみを後生大事に撫でまわしての研究の結果が、いかに独りよがりの、現実からかけ離れた虚像を描き出していたかは、今日では常識である。東アジアの一隅に位置していた古代日本が、大陸、特に中国、朝鮮などの先進文化圏との交流のなかで、どのようにたくましく新文化を採り入れて伸展してきたかについては、周辺諸国に残された当時の文献と照合し辿ることによつて、始めて歴史的事実として実証されてくる。そうした「東アジアの中の日本」を客観的に眺めた眼が、戦後の日本古代史研究を飛躍的に深めたこともまた、今日の常識である。

私の外国旅行も、知らず知らずのうちに、ささやかではあるがそうした眼を養ってくれたと思う。例えば一九五八年にチエコの首都プラハを始めて訪れたとき、演劇大学人形劇

科付属実験劇場「ロウトカ」に飾られてあったのが、ポリチコウ女史（全大学教授）作・演出の影絵人形劇「大井川」の写真であったが、どこかエキゾチックなその日本の女のシルエットを眺めていると、チエコの人形劇人たちが、日本について懐いている幻想と現実との混交したイメージに触れる思いがした。

それからヨーロッパ各国のすぐれた人形劇の数々に触れてゆくに従って、日本の人形劇一文楽を始め各地になお残有している民俗的な人形劇が新鮮に思い返されてくるのであった。

西洋と東洋の人形劇の比較検討から、それぞれの特質が浮び上ってくる思いがあった。歴史的発展の違い、人形の構造上の違い、ドラマツルギーの違いなど、具体的な要素を一つ一つ拾い上げてゆくことができた。特に文楽や淡路の人形浄りの特質や、舞台上の優れた効果などが鮮明に見えてきて、日本の人形劇への理解が逆に深まるのを覚えたのである。

そして現代川柳についても、同じようなブラスを掴むことができた、私は思っている。東欧やソ聯などの詩人や文化人と話合つ機会を重ねるに従って、彼らが短歌、俳句などの短い詩形の表現にいかにか憧れを懐いているかについて、実感することが多かった（残念ながら川柳の智識を持合せた人には出会わなかったが）。

例えば人口一千万人のチエコスロバキアで古今集を中心にした百首ほどの短歌集が、各二万部ずつ三版を重ねて、いつもたちまち売

切れてしまった、と言語学者のネウストプニ氏が話してくれた。プラハ大学の日本語科の教授ヒルススカ女史がチエコ語（散文）に訳し、有名な詩人マテジウス氏がそれを短い韻律詩に直したのであった。

またソ聯の日本語学者の話では、当時（一九六二年）ソ聯では三行の詩が大流行とのことであった。もちろん俳句の五七五の三句体を真似たものである。

このような話を聞くにつれて、漢字仮名交り文——標意標音交りの日本語が、一行二行で完結する短い表現に、いかに適しているかを今更に思わないうではいられなかった。（標音文字での短い表現が困難を伴うことは、短歌や俳句への彼らの憧れの強さからも推察出来よう。）

このような経験は、日本の伝統詩への再認識を迫るものを含んでいる。中年から川柳へ入って当時まだ六、七年にしかならなかった頃の私の眼を開かせてくれた。そして、ことはと形式の特質とともに、川柳や俳句が果してきた社会的な存在価値への認識をも深めてくれたのである。

長律多行のヨーロッパの詩は誰にでも書けるといえるものではないし、例え書いても発表はなかなか困難だ。専門的な選ばれた人々は詩人として尊敬を受けているが（詩人の銅像も多い）ヨーロッパの民衆は句会のような日常的なミーティングを持っていない。自ら創作して、それについて語り合う仲間をほとんど持たない。有名な詩集を買って読むか、精

々同人詩に拠るか、喫茶店などで若い詩人たちが自作を朗読し合うか。このようなヨーロッパの状況を考えるとき、日本の民衆にとっ、句会がいかに深くその孤独感を救い、生活を豊かにしてきたことか、と思わずにはいられない。（西欧の広大な公園のベンチでいつまでも動こうとしない老人たちの孤独な姿が今も私の眼底から消えないのだ。）

外国旅行で得た私の経験は、その後現代川柳へ専心する私の態度にも影響を与えた。

川柳をつねに客観的な眼で眺めることを心がけてきたと思う。私は意識的に俳句の人たちと交流を始めた。同じ一行の詩形に拠る最も近い隣人たちが川柳をどのように眺めているか、という好奇心から始まって、川柳と俳句に通じ合うものは何か、異なる性格は何かを探ろうと心がけた。しかしそれは私にとつて、あくまでも川柳研究の手段であつて、俳人になるためではない。川柳の外側から客観的に現代川柳の姿を眺めようとする試みであつた。それ故、俳人とのつき合ひも、俳誌へ文章を書くときにも、現代川柳人の立場から発言してきたし、川柳人の立場は見失わなかつたと思う。

大分奇り道をしてしまったが、話を始めに戻して、川柳と人形劇の性格について考えてみよう。全く異質の二つのジャンル間に、どのように通じ合う要素が含まれているかに焦点をさしほることによつて、意外なまでに川柳の特質が見えてくると思つたからである。

愛染帖

橘高薫風選

自嘲とは風呂がどんどん漏れている
子のを洗いさみしくなるばかり
装えば鏡の中に水の音
画廊出て夕陽の赤の神々し

八尾市 高橋 夕花
兵庫 辻 文平

月の夜は悪い狸になって雲

高知市 西川 富恵

磨崖仏右手の罪がふつと軽く
君去りてより増してくる海の青

町田市 竹内 紫鏑

師のおごりだった最初の黒ビール
高層にごきぶり配るエレベーター

大阪市 西森 花村

あの世では時効と言う手も効かないだ
あちらにも「おいぼれ」がある和英辞書

堺市 高橋 千万里

老いはみにくし床下の瓶に似て
狂い咲き花の心をよんでやる

大東市 土岐 トク子

思い深ければ黙して孟重ね
子の苦惱母の苦悩と受けとめる

唐津市 桑原 掬治

階段の一段踏んで天を見る
泳げない海の女王の日焼け止め

富田林市 岩田 美代

時雨する自分に負けて電話する
スランプの机連の花など如何です

島根県 大森 孝華

さりげなく素顔の見たい日約し
言う程に孤独愁しむ顔でなし

島根県 堀江 正朗

酒のうまさみんない人だけのなか
自転車がすいすい秋の向うから

島根県 堀江 正朗

初孫にだんだん似てくるお月さま
逢いにきた孫じいちゃん膝が好き

島根県 堀江 芳子
大阪市 江城 修史

子の走るレールの果てにある怒濤
流れ星心の隅に消えぬ人

鳥取市 河村 日満

やわ肌に触れる気分も失せる老い
積立貯金女は根気よいものよ

岡山県 稲岡 正之

美しく見せる角度に座る妻
三脚にすれば平和が固定する

岡山県 出原 敬一

夫婦にも明暗があり城昏れる
雨だれを見つめ絆の冷たさなど

島根県 木村 はじめ

いい湯だなと歌っておれぬ汽車はスト
ついに来た私に古稀の誕生日

出雲市 高見 鐘堂

背筋まで凍てつく石油アレルギー
日本は平和バンドに泣く平和

鹿野市 上垣内 清利

一杯の酒から鏡が綻ろびる
外交の顔を鏡につくり出し

ホノルル市 前山 北海

三面鏡の角度で好きな顔を選ぶ
憂愁の千手さし伸ぶ曼珠沙華

富田林市 中村 優

アスファルト切れた道から母の声
死骸でも蟻にはやれぬ兜虫

八尾市 渡辺 章

死骸でも蟻にはやれぬ兜虫
口笛を虹へ鳴らせば弧をえがき

松江市 梅本 登美也
唐津市 田口 虹汀
米子市 八木 千代

倉敷市 水粉 千翁

青森市 工藤 甲吉

月は煌々と山頂透きとおり
津軽弁都加留蝦夷(なま)の血が流れ

青森市 工藤 甲吉

ランランの分も一本お線香

和歌山市 西山 幸

やさしくやさしく母に縄打つ秋霖雨
母に棲む稚きものよ糸毛毬

兵庫県 遠山 可住

母の折る鶴四次元で翔ぶ遊ぶ
溶け切れぬ塩の気持がわかる父

高知市 宇佐 美和子

炎天下もう逃げられぬ鬼たちよ
夏の終わりにふたりの視野にいるトンボ

大阪市 河野 君子

矢印を進めば進むほどの闇
秋灯下眼鏡に服属してしまふ

大阪市 小出 智子

水鏡女は過去を離さない
岡山市 川端 柳子

骨肉の別れに秋の雲白し
今治市 月原 宵明

三面を閉じて女の性守る
浜田市 佐々木 裕

常套語わたしの骨もガタがきた
島根県 小砂 白汀

最終を走る男に風が風ぎ
鳥取県 和井 観洋

乳母車の木陰亡命したき島
八尾市 高杉 千鶴子

男女の川合うて一つの歴史かな
大阪市 川口 弘生

兎小屋兎といっしょに住んで
京都市 宮尾 あいき

ほんぼうに暮して俺の終着は
高槻市 新岡 回天子

夕顔の白湯上りの女に似る
唐津市 若柳 潮花

人間も仏も故郷へふるさとへ
倉敷市 藤原 桜山

断絶は知らぬ案山子の一本足
京都市 都倉 求芽

種なしぶどうつるりと口の中は秋
川西市 戸田 古方

手帖エンピツ一本だけが見つかった
島根県 角 耕草

酒買って昔晰を聞きにゆく
堺市 伏見 茂美

出すばかりのお金母流のやりくりで
尾鷲市 渡辺 伊津志

星影のワルツが好きは無頼漢
岡山市 清水 金太郎

衣食住足れば容姿に不足あり
平田市 久家 代仕男

回れ右最前列になる不安
京都市 小林 鯛牙子

雲を呼ぶ女の指が阿波踊り
和歌山市 松原 寿子

ここからは花の魅力に負けておく
和歌山市 浦野 和子

待ちわびる秋道連れに羽根帽子
和歌山市 若宮 武雄

選挙カー来ると野良大欠伸する
東大阪市 竹中 綾女

ジグザグに鳥居くぐって孫権かず
京都市 江口 度

やじろべえこともが重い妻をもち
尾道市 黒川 紫香

シルバースhirtそんなに漫画おもしろいか
倉敷市 田垣 方大

背信をみんな知ってる石灯笼
鳥取県 鈴木 村胤子

そんなもの着れる身になりや買いましよ
出雲市 板垣 夢酔

千円紙幣うまく切符に化けて出る
兵庫県 行天 千代

宿題の作文もあり小旅行
京都市 中田 白李

病室も時計の日付けどおり暮れ
宝塚市 吉田 笑女

夕顔の夫を迎える様に咲き
今治市 矢野 佳雲

飛びすぎる鳥は止り木外される
米子市 小西 雄々

花枯れたままの豪華な墓もある
鳥取市 森 葉士人

背負投げ幾度もくって齢をとる
山口県 高崎 雀声

人間にもどれる白紙にもどしたし
八尾市 宮西 弥生

喘ぎ喘ぎつく嘘なれば許せませす
和歌山市 福本 英子

見舞状古いかけらの愛がある
京都市 柴田 英子

本積めば私の心大富豪
京都市 西出 英子

夕陽ではない赤潮が海を染め
京都市 越智 一水

或時の妻母の目で僕をみる
京都市 麻野 秋畝

燃えつきた愛が三面記事にのり
京都市 古谷 節夫

提案をしてから殻の固さ知る
京都市 岩道 博友

夏の陽を隣の古木にいたわられ
京都市 雑賀 美世

楚々と咲く芙蓉を泣かす憎い雨
京都市 原秀 子

盲点をつけば開いて見せる肘
京都市 小谷 清女

合点のおそい同志でうまが合い
京都市 白石 潔

偶像の父文机に夜と居る
京都市 西岡 洛醉

巡礼の心洗うか小雨降る
京都市 時田 誠一

ブル轍外れて一輪野菊咲く
京都市 山本 規不風

運神は福公平に撒くのかな
京都市 松川 杜的

吸い込んで吐いて緑の光明寺

名古屋

風止んで狂い死した蟬一つ

会数市

カルダンのルックため息蹤いてくる

米子市

日々好日空には愛のしゃぼん玉

米子市

雪国の野仏の裾に氷はり

鳥取市

味噌汁に妻の一面のぞかせる

鳥取市

瓢箪を長う作って負けていず

唐津市

ゲートボールトレーニング派手な方が負け

和歌山市

定退は長くて短いドラマです

米子市

前歯生え小さいブラシ買ってやり

唐津市

お中元自分の好きな品に決め

大阪市

ころんでも泣かぬ子ババママ共かせぎ

唐津市

気をつけて声かけ合って門を出る

会数市

公害と書けず地物と高値魚

大和郡山市

米離れた子をしごく青田刈り

愛知県

子に螢見せてやりたく山の宿

岸和田市

背を向けた夏を急かせる法師蟬

鳥取市

りーんりーんと妻恋う虫の夜もすがら

幸せな顔を手向ける娘の墓参

今治市

釣書に別居希望と云い添える

鳥取市

扇風機が音をあげそつな熱帯夜

大阪市

そよ風に聞き耳立てるつぶらな瞳

香川県

天体をめぐる暖い目冷たい目

和歌山市

悪人はいろんな顔を持っている

会数市

頑固者敵も味方も手を焼いた

香森県

よりかかる壁にもあろう好き嫌い

岡山県

初成りの柿仏壇であらたまり

三重県

母にだけ悲しいことは打ち明けず

和歌山市

イロハ順会長サマは別な枠

鳥取市

ウスベラな人情父母のない故郷

豊中市

手枷足枷寡婦から抜けられず

松江市

でまかせのようで絵になる阿呆踊り

東海市

思い出の画布はたのしい彩で塗り

岡山市

血を湧かす相撲夏バテふっ飛ばす

西宮市

赤ちゃんに絶対服従兄と姉

広島県

新居田 胡頰子

羽津川 公乃

欄 蘭

田井 教之

坂口 公子

藤井 春日

五十嵐 操史

花田 たけ志

坪田 冬花

湯川 頼次

西村 早苗

満仲 きく子

竹内 寿美

小山 悠泉

井上 柳五郎

朝山 千世子

砂田 静佳

直原 七面山

打てば響く夫婦であつたのは昔

会吉市

大地震明日が分らぬのが救い

橋本市

秋深しロマンバズルの風になる

米子市

夢ばかり追つた若さも色褪せて

兵庫県

嘘を組む政治へ放つ火矢にぎる

岡山県

一寸したシヨック歯車噛み合わず

鳥取市

五十年妻にわがままかけ通し

岡山県

すぐそこにぶら下る幸が掴み得ず

出雲市

今村 夕路

森脇 善太

青戸 美佐

野々口 ゆう也

池田 半仙

山根 峰雪

田 句味地

内芝 としよ

古野 ひで

石垣 花子

藤森 小雅子

野沢 大漁

岩田 三和

旭川市 朝倉 大柏

大阪府豊中市中桜塚三丁目十三番十五号

送る先一〒560

大阪府豊中市中桜塚三丁目十三番十五号

★

生命線切れているのにまだ死なず

鳥取市 野

柳界展望

原稿締切毎月末

なにもわ会館。で開催、盛大だった。(P56に関連記事)

▼麻生霞乃先生は来年二月には満八十八歳になられるが百歳まで生きるとおっしゃるほどお元氣であるとお生駒へ訪問した西田柳宏子氏からの報告である。

▼川柳全集②「麻生路郎」橋高薫風編は日本図書館の選定図書に決定(既報)

▼吉田秀哉自選句集「冬の海」発刊記念川柳大会・11月25日(日)13時開会・会場・小松商工会議所本館大ホール(小松市園町二)。

挨拶・伊藤茶仏/句集鑑賞・橋高薫風・亀山恭太/題と選者・海・柴田午朗/風

・大野風柳/幕う・中田たつお/教師・吉田秀哉(いずれも事前投句制・11月10

日締切・各題2句)。宛先〒923小松市本町一丁目十・吉田秀哉宛(会費二千円(句集・発表誌))記念パーティー三千。

▼石曾根民郎氏(川柳しなの主宰)は中央公論社の顕原退蔵著作集15巻(雑俳・川柳二)11月刊に「柳縁に柳しなの」を執筆。なお、川柳しなのを執筆の坂本篤氏追悼号を季刊「銀花」九月刊第三十九号に谷沢永一氏(関西大学教授)が記事にして紹介されている。

▼岡橋宣介追悼川柳大会・句集「熊野」発刊(11月初旬発刊)11月18日1時から新大阪チサンホテル4Fで開催。会費二千円(句集「熊野」定価二千円・発表誌)兼題/碑・岡田俊介選/絵・橋高薫風選/火

森中恵美子選/別れ・中尾漢介選/海・堀豊次選/花・谷口光穂選(各題三句)投句拝辞(せんば川柳社・大阪市阿倍野区北畠三丁目一の一)。

▼同人の動向△
第四巻(愛媛川柳の流れ)を発売(P53参照)愛媛川柳七十年の歩みは日本川柳七十年に通ずる快著。頒価

年賀広告受付!

★今年から一口五百円にしてみました。したがって五段の一段が二千五百円になりました。グループをお持ちの方は幾口でも結構です。よろしく協力のお力をほどお願い申し上げます。

★原稿締切は十一月末日

千円(送料共)

▼河村日満氏(鳥取市)から「鳥取文芸協会の要請で「私の川柳」と題して柳話をする事になっていきます

▽11月の句会△

▼菜の花句会は10日(土)6時から西郷会館(八尾神社境内)で開催。近鉄大阪線八尾下車西南歩五分/壁面・菓選/蟹・酔々選/分析・美幸選/ガス・未定/席題二題・各題五句以内。投句料百円・締切当日到着分限り投句先〒581八尾市高安町北一の二五・大路美幸あて。

▼南海川柳柳会は15日夕六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「後始末/幅」誤算。

▼大阪川柳柳会は20日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「熱心/ソフト/丸/生活」。

▼東大阪川柳同好会は24日(土)6時から東大阪市立中央公民館二階(近鉄永和駅)題は「権力/的/下駄/タクシ」。席題二題。

新同人紹介

西川三青

市川きよる

水客・紅月・岳詩・客遊子・推薦



第 15 回 はたらく うた



生かも。

開業医 太田良子

笑わせて患者を手術台に上げ
不信感抱けば病氣も足踏みし
聴診器置けばやさしい父になり
時間外女医は割烹服で出て
税務署は皆んな四角い顔に見え

昭和二十年大阪通信病院眼科へ卒業と同時に
入局。当時耳鼻科医長の故尾崎方正先生に
すめていただいたので始めた。終戦当時患者を
診ながらの日常生活の中で、路郎先生を迎え
ての川柳烏ヶ辻は、実に心暖まる楽しい会で
した。同人に草右、春雄、没食子、竹荘、愛
論、ハナ子氏等。七九程度で開業し、その後数
年は川柳とは無縁に過ぎた。又昭和十七年発
足の川柳烏ヶ辻も竹荘氏死去で三十数巻を以
て中止。最近川柳塔社へ会費持参の際に出
句する程度。不二田さん、葉子さんとおしゃ
べりしている時は楽しくて毎月投句しようと
思うのだが、不勉強で恥しい次第です。

会社員 石川 侃流洞

押しだけで来た人生に見るはずみ
口惜しさに泣いた日もある駄馬の道
駅舎から貨車のこぼれを待つ雀
ひとり住む官舎が花の真盛り
ひよろひよろと日蔭の草が花をつけ

会社役員 加藤貞山

職業軍人九年半押しまくって終戦、職を失
い、必死の職さがしに運よく国鉄に採用され
た。就職はしたけれど社会の風は冷く、掃除
や走り小使いで、泣きたい毎日だったが、辛
抱しているうちに、家庭は女房まかせの仕事
の鬼となつてしまった。
停年近くなつたら、お情けで小さな駅に転
勤、わずかな道具を背負つて独り暮しの官舎
住い。労組もうまく協力してくれて無事役目
を終えた。それからもう七年、規律正しく愉
快な日々を思い出しながら、今は大ホテルの
裏方役でひよろひよろしながらも、勤労の喜
びを味っている。

駅前に住んでせかせかせか無沙汰がち
学歴は言わず職場にある履歴
豪雪に続く不況を切る構え
太っ腹かかえて社長年の暮
大阪で稼ぎ故郷で住む余生

大阪に店を持った頃、柳友の奨めで路郎先
生をお宅にお見舞した事がある。

偉い方だとしみじみ思った。これが切っ掛
けとなり商人の句を我武者羅に作句したがな
かなか抜けない。当時今は亡き白柳さん、双
楽さん、に励まされて玉造と本社句会に通
い皆さんの温い懐ろに飛び込んで作句の道が
開けた。

鳥取では竹馬の友達が「君は川柳を何時作
っているんだ」と聞かれて僕は「忙しい時は

会社員 岩本 雀踊子
働き出す街に見送る妻がいて
凡人の父に大きな弁当箱
働らけば胸の釦が熱を持ち
もう一働きするスタミナのコップ酒
働ける仕合せを持つ影法師

妻の病氣と長女が入学するので自家営業の
飲食店をやめて、会社勤めをしてから三十数
年になる。三十人ほどの会社だが日曜祭日が
休み、五時終業なので川柳を楽しむには申
し分がない。会社も六十歳停年だが、四五
度色々な表彰を受けたので歳だからの辞表も
そのまま。私も来年は七十歳、再度の辞表を
出したが社長曰く「貴君は年をとつたらん、
もう少し社にいてくれ」川柳と仕事が私の人

閃きを種にメモをして夜、作るよ」と云つたら訳のわかたようなわからないような顔して居た。一線を息手に譲つてからはお得意先とメーカーと社員サービスのサビにこれ努めて招待会、慰安会に出席し所望があれば川柳を画き下手な唄も歌つて、大阪と鳥取のパイプ役を引き受けて余生を恙がなく楽しんで居る。

会社員 植山武助

ポーナス日だから飲む人帰る人
安易なる妥協若さが承知せず
成長の課程と失敗許される
続編がない人生と云うドラマ
運命と云う約束へ目をつぶる

サラリーマンは結構やな……等と自営業の方達からうらやましがられる事がある。日曜・祭日は休み、働く時間は限られている。成程気楽な商売かも知れない。しかしながら、同僚間の昇格への目に見えない闘い、一枚の辞令に左右される転勤という宿命、気の重い何日間だつてある。

一方、退社後の長い自由な時間、各所の句会へ出席させて頂いた事も三十年余りのサラリーマン生活のおかげかも知れない。今後「はたらくた」は続きぞう。働ける、と云う事は本当にすばらしい。

明日のために今日がある。一日一日を大切に
して行き度いと思つていきます。
「はたらく歌」汗こそ楽しんで。

主婦 榊原秀子

ふとん干す俵せいっぱい陽がいつぱい
他愛ないよろこび白く干し上げて
縫針に心の乱れみすかさず
手掃木もわたしの癖を知っている
ガス台を磨いて今日の幕を閉す

昔は、若さののつて子育てと主婦業にまっしぐら。思い返すと平凡な毎日でありながらもとても楽しかったようです。それが、子育てが終り、子が巣立ち、姑を見送つた時、心にポカンと大きな穴があきました。でも、わたしには川柳があるのだ。初心にかえてやろうと努力し、少しずつ心の穴を埋めてゆきました。句会へも、出来る限り出させていたただいたおかげで、よき柳友たちに恵まれ現在に及んでおります。ですから、本当の意味での「はたらく句」がないのが残念に思われます。

鋼商 那須鎮彦

無理をせぬ今日の夕陽が美しい
凡人の意気こみテコを借りて来る
号令へまだお茶漬が口にあり
血液型書いた手帳を放さない
せいっぱい働きの靴の紐ゆるむ

特殊鋼商店に、勤めるようになってから約十年、ひ弱な身体が丈夫になり、それと同様に、精神作用も丈夫になったように思う。だ

から、寝食を忘れると言うことはないが、よく働くようになったと、自画自賛、人間、働くと言うことは、修業の場に居る事だと思ひながら、なかなか手前勝手が多すぎるように思えるのである。そこで、川柳では、反省の意味もこめてか、エエかっこばかり作っている。そんな気がせんでもないのである。一日の修行が明日へつながらず、その、エエかっこ、身についてゆくのではないかな。これからも、エエかっこして、エエ川柳を作つて行こうと思つたのである。

豊中川柳会（豊中市文化祭記念）

第22回 市民川柳大会

日時 昭和54年11月25日(日)正午

会場 豊中市蛍池中町3丁目9-20
豊中市立蛍池公民館(阪急宝塚
線蛍池駅西約一〇〇米)

会費 五〇〇円(パンフレット代)

◎賞品 各秀句に贈呈

◎昼食は各自御用意下さい

講演 江戸時代の川柳 堀口 塊人氏

兼題と選者(敬称略、順不同)

「人門」中島生々庵選「受付」田中桂太楼選

「疑惑」増井不二也選「予告」崎山 秋朗選

「成績」金泉 萬葉選「奇蹟」戸山 古方選

「困む」敷内千代子選「湧く」鶴飼 蟻朗選

外に席題2題 締切午後2時
各題2句吐

西日本川柳大会へ出席する朝のこと、本社主幹中島生々庵は、弟子たちと国鉄弓削駅前にある恩師麻生路郎の、俺に似よ俺に似るなと子を思いの句碑へ先生が生前一番お好きであったお酒をそそぎかけ、お慰めをした。すると句碑の文字まで、生き生きとしてまるで先生が、およろこびしているようにさえた。

弓削駅長さんは「普通のみなさんではないと、拝見しておりましたが、ほんとうによいことをなさいましたね」とまるで親の墓まいりに故郷へ帰ってきた子供たちにいうような口ぶりであった。

句碑の傍に一基の白い標柱があり、黒字で青少年指導指定モデル地域と書かれていた。路郎郎の子を思う句と、現代の青少年を守る運動と一体となっている。やはり名句は時を越え生き続けることをこの目で確めてきた。

「川柳が明るい町づくりのおおきな力となつております」と岡山県長野知事は祝辞をされた。弓削町の真中を流れる小川に小さな橋がかかっているが、その橋詰めに、川柳で書かれた立看板がある。帰省して、きれいな水を手で掬うの句。どこでも「河をよこすな」ゴミをすてるな」ときまり文句のところこの町のように、河川愛護を川柳で呼びかけたあたり祝辞のとおり、三木文化賞は伊達にはくれないことを知った。

中島生々庵主幹の車中談話で「西日本川柳大会へよく来た連中に、路郎・水府・三太郎・紋太らしたが、全部あの世に行つても

またゆきたい (西日本川柳大会)

川柳のふる里 弓削へ

阿部柳太

うた」と感慨ぶかげにいう「そつだなあ鉄児・白柳・香林・豆秋・鮎美らもみんなそつださびしくなったね。こんなことをいうのも、年齢だらうかね」と横の小石夫人をみて笑われた。

清水白柳は、病のため医師から川柳をとめられていたが、入院中ベッドの上で選句していて、狭心症が再発して急逝された。「生命ある句をつくれ」というが、ほんとうの生命だけは誰よりも大切にしたい。

「川柳文化を育てる努力を互に大切にした。それが残された者の、つとめである」と中島主幹は、その当時の「川柳雑誌」の、柳壇の巨星弓削に集るの「記事さし、さながら昨日の出来事のように柳話をされ、多くの聴衆に深い感動を与えました。

「体験せざる者は発言なし」という諺があるが、やはり主幹自身が、川柳と生き川柳と共に歩んでこられ、そのなかから自分を見つめられた言葉だと深く教えられました。

当日主幹に同行された小石夫人は、与呂志さんの話によると、お好きなご自身の日本画教室の勉強までお休みになり、ご同伴下さつ

たと聞き、今回は中島柳話を裏表聞かせていただいたことになった。

川柳会場の玄関ロビーには、川柳作品展が開かれており、なかでも中学生グループのコーナーに、みんなの人氣が集っていた。

中学生グループの作品

友だちと比べられては叱られる 憲一

ライバルの点が気になるテスト中 瞳一

宿題がなくてみんなの 笑い顔 誠一

けんかしてまずまず好きになった友 知子

けんかしてから本当の友となり 正行

新婚はインスタントが見破れず 里江子

太陽が虹と緑りのプレゼント 勇一

あすは咲く花を信じている少女 敬友

これら若ものたちの作品を見ると、おとなでは表わすことのできない。清純さと明るく素直な味わすを持っている。

いま川柳人年齢の若返り法が叫ばれているとき、この若いひとたちを大切に育てあげ、もっとこの層を広く大きくしたいもの、考えたひとは、私ひとりではなかつたと思います。

大会ではいろいろな賞がたくさん出されま

したが、私はそのなかのひとつぐらいは、若鮎賞とか「さわらび賞」として、今後若ものグループに出される企画がほしいと思いましたが。

作 楽 神 社

津山市の西方にある作楽神社は児島高德公の十字詩と、前景の松の緑の美しさで有名である。

児島与呂志さんは、この神社の本殿復興寄附金に金壱千円差し出し奉賀帳をみると、児島という姓がないので、気の毒となり、もう二千円追加すると、社務所の係員が「あんた児島はんですか」と態度まで改まり、きつちりお辞儀されたので「ほんまに高德はんと親戚みたいに思われてきて、妙な気持ちで、こちらがけつたいな具合いやつた」とユーモアの



句碑に清酒を注ぐ生々庵主幹

見事である。つかれたので一同休憩して汗をふいていると天から美声があり「みなさんどうしているの私こよよ」もう真上の本丸趾で、手招きしている。女女史である。足も達者なら口も達者なお姉さまである。後で分ったことだが、女女史のその位置が、本丸趾の長局様の御館趾であった。歴史はくり返えず」とい

句を地でゆくような与呂志さん。加えて真実性があるのも、川柳と同じだと思う。神社前の小さなみやげもの屋の老人その横顔を見ていると髭まで、店に売り出されている。高德公の人の顔にそっくりなのも妙であった。

付近のレストランで昼食をする。そのレストランの名が「たかのり」という、昔ながら特高警察が「有名な忠臣の名をみだりにつけるとは」と目を三角にして来ただろうと思わずほへえんだ。

津 山 城 趾

津山市のシンボル津山城趾へ登った。織田信長と本能寺で討死した森蘭丸の弟である森忠政公の居城であったと伝えられている。大きな石垣と本丸趾に続く幾重にも廻るようにつけられた高い石段も

が、今昔を問わず美女の手招きする位置まで同じとは、私もいささかびっくりした。

湯 郷 温 泉

湯のきれいな、そして静かないで湯の町である。小松園さんの話では「昔はこのへんでは、もつと静かやったもんや、ホテルの時期に来たら宿屋ゆかたで、ホテル狩り行ったらスイスイと飛んでいて、ホテル麓にたくさん入れてみやける。大阪へ持って帰ったもんや」という。ついでこちらでもつりこまれて「大阪へ帰ってから、ホテルをどうしました」と聞くと「阿呆かいな、みんな死んどりまんがな」とあつさりやられた。

朝食のとき好郎さんに「ゆうべはよく寝られましたか」と聞くと「なにいうてはんのや柳太と雀踊子の軒にはさまれて、まるで軒のステレオやがな」には参った。

マスカットのあのしたたるような緑と、そして、米のおいしい、静かな川柳の町弓削。みんないいひと。いい旅行だった。

★

— 浜野奇童氏から — 路郎師句碑建立三十周年記念川柳大会には川柳塔社の大筆応援、本当に嬉しゅうございました。おかげで素晴らしい会に盛りあげていただく事ができました。生々庵さんから、路郎先生の「俺に似よ」の額をいただきました。公民館の和室に掲げ多くの町民に披露することにしました。結婚式の控え室になる部屋でもあり意義深いと思えます。



石原青竜刀

暁に死す

東野大八

「小生、最近とうとうガタが来て音声困難、当年の名調子地を払って空し。ネングの取め時かもしれぬ。太々へ山々よろしく。79・7・15」

「小生、体調不良、医に診てもらったら肺炎との事、目下専ら安静服薬天運を待ちつつあり。発声困難いよいよ甚し。多年悪行の報いと諦観はするが……79・7・26」

私あての書信の末尾に付した右数行のあと東京の友人から、青竜刀危篤状態という電話が入ったのが八月二日である。そして三日おいて「今朝四時頃、薬石効なく遂に亡くなられました」の連絡が入った。

「青竜刀さんがとうとう……」

あと言葉もなく肅然と落涙したのは老妻である。受話器を置くなり、私もそのままべったりと腰を下ろし、胸底から熱いものがどろりしようもなくこみあげてきた。そして耳朶のどこかで「青竜刀暁に死す」の言葉がエコーのようにつきつきと、こたましては消えてい

った。昨年、博多での大陸川柳作家同窓会の懇親会で、酒杯を交しながら、話が老少不定誰が先に行くかの遷化の話になった。平均年齢七十歳という老人クラブの会合に等しい集りだけにこれも成行き。一人がこう言った。

「赤い夕陽の満州がわが青春の哀歎のシンボルだったのだから、あの地平線を燦爛として彩った夕陽のようにみまかりたい」

「いや、わが輩は見解を異にする」といい出したのが青竜刀さんである。また、また例の一言居士がーと内心私は苦笑した。

「大正十二年元旦、わが盟友高橋大洋と泰山に登り初日を押んだ。この山は中国歴世の帝が即位するとこの山頂に坐し、その朝廷の安穩の御稜威を祈念する習わしがあった。

そうした神聖な初日を、わが輩は押んだわけだが、日本人としては空前絶後の一大快事だと思つゝる。爾來わが輩は泰山の暁星を頂いて地に還ることを念願としとる。石原青竜刀暁に死す！よく覚えておいて貰いたい」

昭和十九年二月中旬、私はあたふたと北京王府井にある華北事情案内所の所長室に馳け込んだ。所長室で一人の客人と面接中の巖徹さん（大陸生活を通して、この人への巖徹の呼称）は、一体何事だという顔付をした。

「昨日とうとう赤紙がきました。それはさっておき、私は結婚することになりました。あと五日しかありません。ついでには私の親代りになって頂いて、正式に嫁とりの使者になって頂きたい。それが結論です」

「お前らしい足下からトリが立つ話だが、手取早く結論をいうが、相手の娘さんはどうなんだ、お前に惚れているのか。うむ、そうらしい？なら話は早い。承知した。ではこれから行くか」

傍らにいてこのやりとりを聴いていた客人が、このとき呵々大笑一番「面白い青年じやあのう。愉快、愉快」青竜刀さんの紹介によるこの人こそ大陸人には著名な、一世の支那通としてきこえた中野江漢先生だった。私がよく雑文に書きとばす「哀妻物語」のヒロインは、かくて青竜刀さんの快諾によって薬屋入りする仕儀とは相成った。

「どうみてもお前には過ぎたる女房だ。彩票（宝くじ）で頭寿（特等）をあてたようなもんだ。大事にせにやあいかんよ」

それから五日後の、北京神社での挙式の際の、これが巖徹さんの御托宣だった。有無通ずるこんなわけで、私の老妻は巖徹さんを心から尊敬し、ことある毎に「東京の青竜刀さ

ん」への心配りを忘れなかった。わが家には三度、青竜刀さんをお迎えしたが、至れり尽くせりのサービスを心がけ、折ある毎に何かを送ったり、また貰ったりのながい間柄で推移してきた。本文初めの青竜刀先生御不例には、心をこめた慰問品も送ったが、必ずその礼状が届くのを例としたが、最後は音信なし。老妻の気のみもようときたら大変だった。

回顧すれば私と青竜刀さんとの間柄は、実に四十年の風雪を閲している。その公私にわたる川柳という趣味を通しての長い悼文は、「川柳しなの」に詳記したので割愛するが、本誌に関連した事頂として麻生路郎先生と青竜刀さんとの出会いの一幕を記しておこう。

時に昭和38年ころだったと記憶する。青竜刀、宇和川木耳と私が大阪で会合した際、青竜刀さんがこれから路郎先生のお見舞いにかきたいと言い出した。この日、路郎先生は、大阪通信病院から退院された直後で、万代のあの居宅の奥の間には、大きなベッドが部屋いっぱいを占領していた。三人が訪れた日、路郎先生は、なんと背広とネクタイ姿で、ころりとベッドの上に横になっていられた。

「いや、実はこれから文楽に行こうと思っただんやがもうやめや。大八君がきたことやし、青竜刀君という珍客の顔もある。文楽行きは日延べや」

と先生は大変なごきげんぶりだった。青竜刀さんは部屋の片隅の寒山寺の拓本の屏風をみて、懐しき一しおの面持ちで、四人

はたちまち大陸だんぎを展開する。路郎先生は、満鮮旅行の思い出を披歴し、その間の先生の質問に、大陸人の青竜刀さんは、その大陸観をもって受け応えし、話ははずんだ。葎乃先生お心づくしの手料理とビールが並んだことだが、先生は病後のことでもあるし、ビールのコップを手にとされるたびにハラハラして大いに気を使った。しかし先生は「ええがな。大陸人。こっやうって飲むのも久しぶりや、うれしんやがな」と、木耳さんが所望する色紙にも気軽く筆をとられたのである。

「路郎先生は川柳家にしておくのは惜しい人物だ。じっくり別のことを専心勉強する学識の研究者になればよかった。この点、川柳は先生を誤らしめたな」

というのが辞去した車中での青竜刀さんの路郎先生評で、この訪問がきわめて有意義であった点に至極満足の態だった。

大陸生活の中で、私が「川柳雑誌」と初めて対面したのは、青竜刀さんの手許にきていたこの本を眺めたことに初まる。

「貧乏しながらカネにもならぬ川柳に、身体を張ってひたむきに打ち込んでいる。この雑誌のいいところは、その情熱が全頁にみなぎっているところだ。麻生路郎という人は、この点、エライ人だよ」

青竜刀さんが満鉄時代だから、戦争もはるか以前のまことに古い話だ。しかし、この青竜刀さんの一言から、私と路郎先生の川柳との深い因縁が生じたと、しみじみといま回顧

する次第だが、青竜刀さんも川雑にはよく書いた人である。路郎先生の川雑のその晩年、河野春三さんらの現代川柳への傾斜は、ついに現川連委員長も勤めた青竜刀さんの存在があったためかもしれぬ。

寢屋川市文化祭

第三回市民川柳大会

日時 昭和54年11月4日(日)

正午開場・二時開会

会場 寢屋川市立総合センター

一階会議室

柳話 『真剣』 川柳塔社 戸田古方氏

兼題 『医者』 江口 度選

『カード』 住田英比古選

『食べる』 青木 史呂選

『塾』 菊沢小松園通

席題 当日二題発表

選者 西田柳宏子氏

出句 締切午後二時・兼席題各三句

呈賞 選者賞他

会費 入選句集代五〇〇円

主催 寢屋川市文化会実行委員会

後援 三井ヶ丘川柳会

霜

藤井明朗選

焚火の輪 昼は温くいと朝の霜 天彦
 白菜の鉢巻霜に耐えている 悠泉
 百度石の霜は朝湯を待たずとけ 武水
 霜の朝冬の匂いが通り過ぎ なりこ
 霜が来て秋の友禪染めあげる 満津子
 霜が降る油が足らぬビニハウス 耕草
 霜の朝老化に挑む径を行く 竹馬
 霜枯れの空に虚勢をはるトンビ 裕
 初霜に慌てて鉢の種類分け 通風
 山官の立木調査を泣かす霜 弘朗
 こぼれ花心へ霜が降って来る 博也
 ビニールの中で霜など知らぬ苗 一保
 寒月が霜庭に冴えて人を恋う 寿美子
 初霜へ干柿ひとと粉をふき 彩平
 霜害の子報に急ぐ農作業 多賀子
 霜柱 犬まだ小屋にちぢこまり 可保留
 しはるねの挨拶布団の襟の霜 どんたく
 舗装路の端でみつけた霜柱 カズエ
 孫より愛しい鉢へ霜囲い 軒太楼
 病棟のナースの足音冷える霜 みどり

ホタン園霜よけ花の頃知らず 花子
 初霜へ軒の雀はまだ啼かず 代仕男
 霜柱踏んで農家の秋じまい 越子
 霜枯れて萌えた日もあり葉鶏頭 孝華
 霜柱 土が鳴ってる朝の靴 女
 霜踏めばサクサクサクと冬の音 七面山
 霜子報野菜に何にもしてやれず 雀声
 地虫みな潜った頃を待つて霜 本蔭棒
 霜解けるように誤解が一つ解け 洋々
 霜柱踏む靴底の征服感 夢酔
 吐く息の白さよ霜に負けまいぞ 一保
 美しく咲いて霜には弱い花 登美也
 心まで病んで蒲団に霜が降る 虎秋
 豊作を不作に変える春の霜 正朗
 地上部は霜にやられた芋畑 三和
 霜静か夜明けを草と共にいる 凡九郎
 霜にやられた野菜暦は狂うてる 回天子
 七輪へ霜がおりてる 船世帯 佳雲

霜蹴ってきた配達へ言葉かけ 満津子
 雑草が霜へ抵抗して燃える 宵明
 霜おりて過疎には早い冬支度 軸

東大出の自慢の息子に反むかれる 女
 補導され教育ママをまごつかせ 彩平
 山売ったほどに教育実らない 芳子
 教育はうちのママから先にして 義美
 教育の接点親子ずれたまま カズエ
 宣伝カーに教育されていた一票 雅風
 修身のない教育を淋しがり 弘朗
 塾から塾僕の日課はママが決め 宵明
 教育がありすぎ職安手古摺らせ 木魚
 教育のすすめ幼児が狙われる 耕草
 教育長に面接がある文部省 亭
 共稼ぎ医科に進める意地がある 白李
 切売りの教育論に明日がない 一路
 なぐつたらあかん教育はかゆがり どんたく

教育

藤原桜山選

初歩教室

題 — 反対 —

本田恵二朗

気取りや、気負いや、銜いなど、一種の技巧らしさが匂う句に出会うことは、あなたも私も共に数多く見たり、読んだりしていることである。それは作家の主観であり、作家の好きな描写法であるから、それでよいのだが、あまりオーバーな技巧臭を感じると、鼻をつまみたくなる。

荒削りであったり、幼稚そうであったり、素朴そうであったりして、作家の化粧せぬ素顔がのぞいているなど感じられる句に親近感が湧いてくることがある。そんな句を軽視してはならないと、私はいつも思う。

片隅に咲く雑草の花の可憐さを想わせられるのである。句材も句境も共に中広くなっている現代川柳のその巾一杯に批判や鑑賞の目をそそがねばならぬと自分に云い聞かせている。

反対をおし切り遂にゴールイン 静 絵
 (反対を愛で押しつけゴールイン)
 黙っていて帰り道での反対論 峰 雪

反対をされて二人で挙げた式

(反対され二人でこっそり式を挙げ)
 反対はせぬから嫁けと背を向けろ
 (反対はせぬから嫁けと母が折れ)
 (反対はせぬから嫁けと涙ぐみ)
 おそ過ぎる反対したわけ母も亡し
 (反対をしたわけ話す母や亡し)

同 幸代

反対を押し切る力骨エネで

(反対を押し切る自信の鼻が折れ)
 解決も反対ありてこと運び
 (反対の声が解決おびき寄せ)

同 茂樹

反対はせぬがウンとも言わぬ父
 病気見舞かえって病友に励まされ
 (病友に元氣を出せと叱られる)
 反対の旗振りだけのしり

同 美乙女

反対をしていて裏で手をにぎり
 (反対論の裏でこっそり手を握り)
 なんとなく右へならえて反対なし
 (なんとなく右へならえて出す反旗)

同 美佐

反対をすれば反骨ありそう
 (反対をすれば反骨ありそう)
 反対の手があげにくい前の席
 発言がたくて反対の手をあげる

同 公乃

反対がご興味で発言好きであり
 (反対がご興味で発言好きであり)
 反対をとなえず欠伸大きくす
 (反対を大きな欠伸にして見せる)

同 大鷹

反対の声に若さがまた残り
 (反対の声に若さがまた残り)
 反対の父の理屈が負けてい
 (反対の父の理屈が負けてい)

同 八文銭

同居して妥協ばかりもしておれず
 (反対の父の旗色少し褪せる)
 反対派戦術秘めて歩み寄り

同 美世

反対派歩み寄る色ほのめかせ
 (反対派歩み寄る色ほのめかせ)
 反対を押しつけて嫁いだ娘を案じ
 あの時の父の反対今に活き
 黒を白とする反対なら許せそう
 民主主義反対意見も申か
 (反対の意見も頼もし民主主義)
 (イエスありノーあり民主主義生きる)

同 なみ

(反対派歩み寄る色ほのめかせ)
 (反対派歩み寄る策ちらつかせ)
 反対を押しつけて嫁いだ娘を案じ
 あの時の父の反対今に活き
 黒を白とする反対なら許せそう
 民主主義反対意見も申か
 (反対の意見も頼もし民主主義)
 (イエスありノーあり民主主義生きる)
 反対をすれば世間が狭くなり
 反対も出さずひそめて住む小鳥
 (反対の声をひそめて住む小鳥)
 反論の余地を与えず多数決
 反対をすればお腹の子が困り
 (反対は止そう胎児がかわいそう)
 反対が出そう幹事はなだめ顔
 執念の熱意に反対はだされる
 (執念の炎が反対を焼きつくす)
 反対をアピールできぬ汗を拭く
 (反対をアピールできぬ汗を拭く)
 反対はせぬがと擦手からいびり
 反対の意見へ圧力強過ぎて
 本心では無いが反対する立場
 (本心は賛成 立場では反対)
 二次会へ反対したものついて来る
 好きだからちよっぴり反対言うて拗ね
 (反対を云うて拗ねてる好いている)
 諫言を無視して反を舐め
 反対の机上論容れて敗を舐め
 (反対の机上論議に押し切られ)
 ローカール駅また行き違う列車待ち
 (単線駅反対列車に道ゆすり)

同 頼次
 同 三男
 同 佐代子
 同 伊都
 同 保夫
 同 柳五郎
 同 可保留
 同 利美
 同 紀美代
 同 句味地

夫が先定退になり留守の役

(定退になった夫に留守預け)

反対はもう出来ぬ腹見せられて

(三つき腹見せられた帰り道)

反対の意見はつきり母として

(反対の意見 母としてためらわず)

孫あやす顔反対が消えている

(反対をした顔でなし孫を抱き)

反対もあつた華燭の披露宴

(反対もあつたが暗れの角かくし)

押し切つて勝つた自説を悔る酒

(反対論で押し切つた酒ほろ苦く)

娘の縁談父一べんは異を唱え

反対をしてもおそいと目をつむり

(反対は手おくれだよと目に云わせ)

反対されて燃ゆる思いはなお募り

(反対されもえる思いがもえつものり)

同

同

誠一

同

美智子

同

同

小雅子

同

同

同

露杖

同

同

瓢太

同

同

同

何でも反対されど自説は持つていず

(自説持たぬくせ反対の手を上げる)

反対の臭手に気をもちたせ

(反対のけはいはのを見せ気をもたせ)

反対の言葉で真意をさぐり当てる

(反対の言葉で本音をさぐり当て)

反対の語をせき止めたのだ仏

反対をせずにはおれぬ正義感

(正義感が反対せよとけしかける)

真心のある反対に目を覚し

(真心のこもる反対に我を折られ)

反対の声をちよびり入れておく

反対を笑顔で受ける胸の中

反対が二人の仲を固くする

さらいよと云つて待つて彼の腕

鉢巻をすると反対したくなり

反対のシンボルマークです赤い旗

反対をするのも息子なればこそ

同

同

静佳

同

同

同

胡頹子

同

同

同

三和

同

同

紀久子

同

同

勝美

同

同

教之

反対派も賛成派も地球号に乗り

敬老の日に老人くたぶれる

園児の靴あべこべのままバス降りる

このころは反対の面脱げぬ日日

反対の一人孟伏せたまま

札束の偉力に負けた反対論

よく似合いますわと女の口と肚

天才かも知れず馬鹿だかも知れず

反対をすれば駆落ちする構え

賛成の地固めに打つ反対論

反対した人の善意を知る逆境

反対の言葉の中にある本音

反対へみごと先手が打つてある

同

同

英子

同

幸

同

同

慶彦

同

同

武水

同

同

寿子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

清原理川川柳集

「不皿」 (展望叢書⑨)

題一折目一11月20日締切(一月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
☎七一一

本 田 恵 二 朗

愛媛川柳の流れ

(第四卷)

長野文庫著

著者はすでに、句集「つるし柿」句論集「せんにゅうのおと」句集「しあわせ」第一卷・第二卷・第三卷「愛媛川柳の流れ」を出し、さらに今度、同第四巻を發行。

序文で月原宵明氏は「県の川柳事情に精通していることは第一者で川柳の生字引」であ

ると書いておられる。愛媛川柳七十年の柳史を明治時代からの句で示した労作にはただただ頭が下がる。

そのほか「川柳年表」がある。明治35年

「川柳関係―川柳胎動期」県内事情―正岡

子規没―または「社会事情―米一升13銭」な

ど昭和53年までつづく興味深い読み物もある。

表紙の絵は今回も水粉千翁氏(本社同人)である。堂々二六二ページ。セヒ二説をおす

すめする。(不) 頒価千円(二共)

申込所・〒794今治市共栄町二―二―三三

長野文庫

独自の企画で好評を博している「展望」の

第九集である。序文は時実新子氏。―この酒

乱時代の理川を理解し、許し合った友は少な

い―云々とあるように著者は好酒家のおかげで

ある。それだけに興味が深くなる。(頒価五

百円・送料別) 發行所・大阪府茨木市三咲町

3―18・川柳展望新社

大 萬 川 柳

「繰り返す」 入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 三百二十三句
入 選 四 十 六 句

東大阪 美 子
七転八転夢を追う若さ
藤井寺 吸 江
繰り返しがまたはじまった酔うている

鳥 取 露 杖
長続きしない禁煙繰り返す
和歌山 和 子
寄せて引く波へ自問を繰り返す

和歌山 寿 子
繰り返す逢うは別れと知りながら
堺 ひろ子
また老いが云わせる愚痴としてゆるし

香 川 教 之
繰り返す歴史軍靴の近くなる
大 阪 道 子
繰り返し読む幸せな娘の便り

熊 本 一 進
公約は何時も定った繰り返し
大 阪 柳 志
将を射ん馬へ握手を繰り返し

八 尾 夕 花
繰り返し繰り返し読む母の文

繰り返し読む吉報に酔うている
寝屋川 度
これでもかこれでもかとCMが

くり返す愚痴にさびしさ隠されず
大 阪 文 秋
倉敷 素身郎

繰り返す懺悔に神も苦笑され
尼崎 千 子
平凡な繰返しです平和です

繰り返し教えてくれた母は亡し
大 阪 ふ み
繰り返す叱言が耳をつんばにし

繰り返すお世辞を軽く聞き流し
米 子 雄 々
開眼を願う達磨が連呼する

尾崎利美
暗記するほど読まされる子の絵本
島根 裕

今 治 佳 雲
思惑がからぬ握手を繰り返し
尾鷲 伊津志

人間の弱さもしやを繰り返し
名古屋 枯 梢
繰り返す愛を子供はうらさがり

繰り返す歴史に戦火の臭いする
米 子 千 代
繰り返す誓いに片目グルム飽き

悲慘さを繰り返すまい原爆忌
出雲 夢 醉
唐津 虹 汀

黙々と水車は廻る今も亦
富田林 美乙女
こりもせず恋の遍歴繰り返し

繰り返し出稼ぎが読む国便り
和歌山 英 子
雑草の四季繰り返す狭い庭

繰り返すオイルシヨックに躍らない
大 阪 小 雅 子
繰り返し読む友情の温し

繰り返す四季にも狂う花の貌
和歌山 公 子
繰り返す試歩へ明日の夢を盛る

繰り返す老母の注意を抱いて出る
佳 句
東大阪 美 子

幸せは同じリズムで重ねる日
和歌山 頼 次
転んでは起きる人生繰り返し
和歌山 和 子

繰り返す心経一縷の光追う
和歌山 寿 子
円周を駆けるドラマを繰り返す
西 宮 喜代子

子離れの淋しさも順にくり返し
大 阪 美 恵
繰り返し口止めをする愚かしさ
和歌山 武 雄

愛憎をくり返ししてする夫婦です
八 尾 美 幸
繰り返す倅せ夫の靴履く
選者吟

熟練にしても初心忘れてず
昭和五十四年度
ベストテン（九月現在）

- 一 百 酒 一六、五 西宮
- 二 満津子 一六、五 大阪
- 三 寿 子 一五、〇 和歌山
- 四 千 代 一四、〇 米子
- 五 美 幸 一三、五 八尾
- 六 道 子 一三、五 大阪
- 七 小 雅 子 一三、〇 大阪
- 八 和 子 一三、〇 和歌山

九優	二二、五 富田林	一五吸	江	九、〇 藤井寺	二一右	近	八、〇 守口
一〇柳志	一一、〇 大阪	一六夕	花	八、五 八尾			以下略
一一文秋	一一、〇 大阪	一七美	子	八、五 東大阪	昭和五十四年度第十二回(最終回)	「区切り」	三句以内
一二花梢	一一、〇 富田林	一八頼	次	八、〇 和歌山	昭和五十五年第一回	「区切り」	三句以内
一三真砂	一〇、五 大阪	一九悠	泉	八、〇 東子		締切	十一月二十五日
一四武雄	一〇、〇 和歌山	二〇大	柏	八、〇 旭川			

川柳塔社常任理事会(10月4日)

あと三日とせまる二賞発表句会と同人総会へ諸氏はもう冷静である。やることをやったという安堵感からであろうか。

多久志氏の退院も近いと、生々庵主幹からご報告があった。
二賞発表句会の新会場には、柳宏子、与呂志、鬼遊、滋雀諸氏がすでに下調べも済み、

準備おさおさ怠りないという裏方ぶり。こういう人たちがあつての舞台装置をみな忘れ勝ちである。

没食子・カネ女ご夫妻の句集「夫婦」を出席諸氏に一三天からおわたしする。「表紙の色といい立派な本や」とお賞めをいただく。
出席 | 百酒・水客・潮花・形水・太茂津・薫風・紫香・生々庵・萬的・与呂志・小松園・岳人・一三天諸氏。(11月は5日(木))

雅号ぶつちやけばなし(184)

てきせい



宮口 笛生

みやぐち

川柳を始めた頃、本名賢治の賢をとって賢坊と自分勝手に名乗り、投句や句会の座をけがしていた。四年程経た時に番傘同人の長宗白鬼氏が、もう結婚もされたことだし賢坊なんて子供っぽい。国鉄でS.Lの機関士をしているところより、あの勇壮なS.Lの汽笛を生む。機関士は笛を生む笛生はどうか。と、有難い号をいただいた。
以後故北川春葉氏に師事して川柳作句に励み、以来三十余年の年月が経たという感じ。現在国鉄での川柳活動に精進しています。職場でも笛生、笛生と本名を自分でも忘れてしまひそう、本名が笛生になっています。国鉄電機区運転当直助役(五十三歳)

村田瓢太著

川柳「紅へにはな華」

序文・川村好郎 | 編集・不二田一三夫
川柳生活二十五年を記念して、句集は十二月初旬にお目見得する。奇術師としての氏の半面を知る好著。
| 句集刊行記念句会は55年6月6日です。

発行所 川柳塔社

NHK川柳募集

課題 「もみじ」 川村好郎選

送り先 〒540 大阪市東区馬場町
NHK近畿本部「老後をたのしく」

発表 十一月二十四日(土)午前九時十五分 ラジオ第一放送(全国放送)

係 「老後をたのしく」の時間

写真前列右から「本間満津子・生々庵主幹
・松原寿子・（後列右から）桑田静子・岩田
三和・和田継久子の皆さん



久しぶりに和室の会場になったせいか、くつろいだ雰囲気の人々総会になった。
衆議院総選挙が、台風18号接近の雨に祟られて、低調とのニュースに合せた訳ではないだろうが、島根県川柳大会とかち合って、山

54年度二賞発表句会と 同人総会

昭和54年10月7日
会場 なにわ会館

有信 新之助

陰勢の参加がなく、三十六名と例年より少いようだ。

二時の定刻を十五分過ぎて、西田柳宏子氏の司会で総会がはじまった。

「今日、御来場の皆さんの御意見を聞いて、今後の運営に役立てたい」と、川村好郎氏の開会の辞に続いて、中島生々庵主幹の挨拶がある。

日川協初代理事長の片山雲雀氏が、老齢と健康上の理由で辞任されたので、二代目理事長の就任要請が、生々庵主幹にあり、熟慮協議の結果、八月十三日に受諾を回答、大阪の日川協理事会が、東京と連絡の末に、正式に理事長に決定したことが報告され、その重責を全うできるよう、川柳塔の将来の方針に協力してほしいと挨拶された。

それから議事に入り、欠席の若本多久志氏に代って、川村好郎氏が会計報告で、経費の節約にも努力したが、印刷方法を活版から写植に変えてみたら、従来ものとはほとんど変わらない出来なので、印刷費が大巾に軽減でき

て収支が改善され、カラ出張もヤミ給与もない、健全な収支であると説明された。

役員改選では、西尾栗氏が規約第三項を、役員選出は同人総会に於て、選挙又は適当な方法により選出する。と柔軟な条文に変えることを提案され、賛成多数で承認理事会一任ということになった。

事業報告は、句集「千亀利」高橋操子「地下鉄」児島与呂志「続・老いの坂」若本多久志「川柳全集」麻生路郎「橘高薫風」夫婦「市場没食子」紅華「村田瓢太、白い歯」島居百酒「青い海」野村多茂津「ささやま」小西無鬼の九氏により刊行された。

四月に路郎先生の第二句碑の在る大和へ、五月に四国路へ50名の吟行が行われたこと。九月九日に弓削に在る路郎先生の第一句碑建立三十周年記念句会が催されたことなどが報告された。

質疑応答では、会計監査役のないことが指摘された。早速二名を選出することになる。川柳塔の句風が古臭くなったのではないか

中島生々庵主幹から路郎賞を受ける松原寿子さん



と、自分も痛感するし、外部からもそういう声聞くので、何とかしなければならんのではないかと、という、橋高薫風氏の発言に対して、塩満敏、高杉鬼遊、生々庵主幹、戸田古方、村田瓢太、山内静水氏らより発言があったが、あまり急激な変革は、かえって弊害があるかも知れないので、路郎先生の精神を失わぬように、一歩一歩漸進的に、理想像に近づいて行くのがよいと、要約できる結論に達した。

路郎先生の出身地の尾道に句碑を建てる計画があったが、その後どうなっているのかという山内静水氏の質問に対して、島居百酒氏が答えて、紆余曲折があって、まだ実現のめどはたっていないが、強力な地元周辺のバックアップが必要とのことだった。

閉会の辞は有名な菊沢小松園氏で、一年の経つのは早いもので、進歩発展が目立たないが、一歩でも二歩でも前進するように努力しようとは結ばれて、予定通りに総会は終了した。

懇親宴でほどよく酔った笑声が、会場に戻ってくる頃には、早目に句会に参加する人が増えてきて和室の大広間が賑わってくる。

おめでとくと受賞の喜びを交わす挨拶が聞こえて、和やかに晴れ晴れとした雰囲気は盛上ってくるなかで、定刻に西田柳宏子氏の司会で二賞発表会がはじまる。

挨拶に立った生々庵主幹が、日川協の理事長に就任したことを、いままで伏せていた経緯を更めて説明して、句会に参加した人々に協力を要請した後、それぞれの授賞の句に感

想を述べ、川雛時代にも他社にもない、また川柳塔発足当時にもなかった、カラーが滲み出ている、進歩発展のあとが見られる。女性の繊細な感覚には、大いに学ばねばならないと祝辞を述べた。

賞状と楯を受ける度に、満場の拍手が湧くなかで、授賞式が終り、二列に並んだ受賞者に板尾岳人氏と塩満敏氏のフラッシュがきらめいて、一年間の努力の結晶が輝いていた。

(懇親宴出席者) 古方・静水(竹原市)・葉子・一三夫・与呂志・希久志・小松園・文秋・薫風・鬼遊・敏・滋雀・萬的・客遊子・潮花・水客・紫香・太茂津・好郎・生々庵・寿子(路郎賞)・翠光・百酒・寿馬・喜風・柳宏子・三十四・笑俳・瓢太・凡九郎・三和(川柳塔賞)・形水・栞・洋敏(諸氏)。

同人総会 式次第

司 会	西 田 柳宏子
開会の辞	川 村 好 郎
接 拶	中 島 生々庵
議 事	

(1) 会計報告(多久志氏欠) 川村好郎

(2) 役員改選

事業報告	西 尾 栞
質疑応答	中 島 生々庵
閉会の辞	菊 沢 小松園

【同人規約一部訂正】同人名簿P5十八行目に監事二名。P6四行目(三)役員の選出は同人総会において、選挙又は適当な方法によりこれを決定する。太字は訂正された箇所。

川柳塔社新理事紹介

高砂市 吉原 紅月
姫路市 保西 岳詩
京都市 都倉 求芽
和歌山市 垂井 千寿子

本社 十月旬会

会場 なにわ会館

七日 午後六時

小雨まじりと総選挙の投票日。出足のわるいのは覚悟の上だった。だが二賞発表句会の始まるころには80氏を越す盛会となった。

会場が近鉄百貨店の近くとあって足場もよく、久しぶりの明かるい日本間でゆつたりと心がくつろぐ。終日結婚式とカチ合ひ、気分まことよろし。さわやかな二賞発表句会だ。この日の月間賞杯は会場内で二賞と同人総会の原稿を書く有信新之助氏に輝いた。

(受付・児島与呂志・塩満 敏)
(進行・西田柳宏子) 記録・高杉鬼遊)

出席―静水(竹原市)・古方・希久志・小松園・新之助・文秋・柳宏子・鬼遊・滋香・敏・与呂志・萬の・一三夫・潮花・紫香・水光・大茂津・好郎・修史・寿子・生々庵・翠光・百酒・寿馬・三十四・栗・薫風・笑俳・瓢太・客遊子・喜風・凡九郎・弘生・岳人・三和(島根県)・形水・洋敏・雅風・静子・喜代子・満津子・道子・綾女・としよ・小路・英壬子・規不風・桐下・千万里・武雄・千寿子・勝美・維久子・花梢・弥生・柳伸・史好・

度・誓二・以兆・寿界・千代三・みずほ・雀踊子・頂留子・鎮彦・三男・きみ・川狂子・幸生・酔々・美代・英子・茂雄・一明・公子・和子・庸佑・美幸・白兔・猿・葉子。

席題「がっくり」 島居百酒選

がっくりと肩を落しているゲルマ
がっくりと片目ゲルマに秋の雨
がっくりと新派に哀れ八重子の死
自信満々投げて打たれたホームラン
御晶屑をがっくりさせて又打たれ
一と桁の違い逃がした宝くじ
がっくりと大事にしていたガラス玉
カネ一つガツクリ我慢の鼻が折れ
がっくりと鯉の波紋を追う釣師
芸人をガツクリさせている欠伸
上げ底の厚さががっくりした土産
がっくりとしてから急に老けてくる
がっくりとがっくり恋の芽が芽ばえ
まさかのに少年Aは吾が子なり
がっくりしたとがっくりしておらず
かど番に膝を傷めた大相撲
親ほどはがっくり落し娘が嫁ぐ
父の肩ががっくり落し娘が嫁ぐ
男じやないかのがっくりの肩たかれる
あつけないか終るドラマの最終回
がっくりとしている割によく喋り
がっくりの話しは老母に届かせず
がっくりとした息子の日記帳
信じてた味方に背後つつかれる
がっくりを包んで父の座を守り

明日がまたあるさがつくりなどしない
五人目も期待外れた夫の名
外電が伝える死亡した女の名
がっくりの姿は見せぬ自尊心
がっくりと背伸びの足を折る嫌味
鑑定に出した家宝は贋作で
銀行を出てがっくりの貌になり
がっくりと血の連がり席を蹴る
がっくりの肩へ嚴父の温い声
がっくりとした姿は妻子に見せられぬ
酷評にがっくり筆を捨てた著者

席題「につこり」 野村太茂津選

菊薫る今日につこりと路郎賞
につこりと満座の中で耐えている
上役がにつこりすると怖ろしい
ニッコリと受けた笑顔にある自信
につこりとみんな小さな嘘を持つ
につこりが出来ぬライバル意識もつ
につこりと笑う男に鬼をみる
につこりと煮ても焼いても食えぬ方
につこりと父は玉手をつけてくる
ゴキブリがにつこり笑う女部屋
嫁はんが逃げてにつこりする男
につこりと疲れをかくす母の思慮
につこりとしてから深呼吸する女
忿怒羅漢につこりたいと怒ってる
につこりが見たい幕前の特級酒
にこりともせず嬉しさに震えてる

滋雀
三十四
新之助
道子
与呂志
和子
好郎
小松園
としよ
雀踊子
紫香
百酒
小路
和子
鬼遊
柳宏子
美代
花梢
寿界
維久子
千代三
潮花
静水
寿界
鬼遊
与呂志
希久志
生々庵
美代
道子
武雄

どん底でつこり顔を忘れない
 おやつさんにつこり手形落ちました
 つこりに落ちて穴まで引きずられ
 つこりに負けても一度肩を貸す
 犯人の方がつこりして写つり
 落武者に夕陽につこりしてくれる
 晩酌が解かれにつこり病んだ父
 プロポーズにつこりやんわり断わられ
 つこりとしたので企みがわかり
 演出かも知れぬにつこり妻の知恵
 つこりの奥に試練の海がある
 つこりと笑う悪魔の顔もある
 つこりと涙のぞかれまい仕事
 つこりと小さな秘密しまつとく
 地蔵様につこり笑みを返される
 つこりと鬼が笑えば考へる
 つこりと笑うつ明日が来てほしい
 つこりと笑えば実印だつて押す
 つこりと訣れた背なが泣いている
 一応はつこり毒気抜かれてた

勝馬 醉々 千万子 和子 小松園 醉々 雅風 洋敏 文秋 生々庵 雀踊子 生々庵 水客 千寿子 凡九郎 潮花 和子 大茂津

兼題「地下鉄」 児島与呂志 選

馴れた靴はいて地下鉄乗ると決め
 地下鉄は台風一過をまだ知らず
 本町で降りると船場のおいする
 寝たきりの僕にも地下鉄無料パス
 地下鉄は日の当たらない街の足
 地下鉄を反対側に出て迷い
 地下鉄に乗っても続く敬老会
 地下鉄で撒いて難波の灯で遊び
 地下鉄のネタで漫才売れに売れ
 地下鉄の訣れに交差点がない
 地下鉄の駅が出来ます青写真
 地下鉄を出ると思わぬ方に陽が沈む
 都会の顔で地下鉄降りてくる
 地下鉄にのがれる道のない怖さ
 地下鉄出口へきつちり屋台を出す飲み屋
 地下鉄が通る噂を見逃がさず
 はずかいに横切る地下鉄なら安い
 日曜の地下鉄公園行に乗り
 地下鉄へ矢印ばかり見て歩き
 地下鉄へホルモン焼が匂つて来
 地下鉄で足踏んだのが現在の妻
 地下鉄で来いと出口も教えとく
 雨降りと思う地下鉄床という誇り
 地下地に御堂筋線という誇り
 昇つて下りて下りて昇つて地下にのる
 地下鉄の渴きが癒える傘の水
 地下鉄のよさは乗り馴れてからわかり

柳伸 道彦 鎮二 誓二 武雄 生水 形水 生々庵 潮花 一三天 寿馬 小路 小松園 英子 千万子 萬的 庸佑 桐下 弥生 柳伸 喜代子 雀踊子 柳伸 誓二 鬼遊 洋敏 寿界 幸生 与呂志

兼題「続く」(多久志氏) 菊沢小松園 選

老後へと続く年金試算する
 続く人なくて軍靴も消え果てる
 席蹴つて立ったが誰も続かない
 この人に続けと言えぬ朝の靴
 立ち読みの昨日のつぎが売れちゃまい
 まだつづく苦勞やつぱりまだ死ぬぬ
 沈黙が続いて金とも言うつとれず
 明け方のつぎが見たいた亡母の夢
 癌でない嘘がいつまで続くのか
 続編に真犯人が伏せてある
 未週に続くドラマの菌切れよく
 無人駅ここから故郷の続く駅
 賞めたのが因果で続く下手な歌
 ひとりひとりの想い出続く空がある
 ふり向けば続いてくれる人のいて
 残り火をもやし続ける火吹竹
 関係が切れず送金まだつづけ
 お人良しローンの続き子が頼り
 だんまり続くどうでもしろとふて腐れ
 母の糸何処まで来てもつづきそう
 唇が追つたところあと続く
 蟻に続く働きの者になる
 カラオケへ少うし酔うたのがつづき

一期一会静かに石を積み続け
 泣きつづけてもアカンと泣虫悟り出し
 落慶へ続く者無き宮大工
 秋晴れの城に観光バス続く

優 枯梢 文秋 英子 満津子 凡九郎 水客 道子 新之助 和子 三男 頂留子 維久子 静水 寿子 笑俳 生々庵 紫香 千代三 鎮彦 萬的

54年度本社句会全出席者(11月現在)

- 菊沢小松園・桑原喜風・戸田古方・島居
- 百酒・若柳潮花・山本規不風・不二田一
- 三夫・橋高薫風・板尾岳人・津守柳伸・
- 香川酔々・金井文秋・藤田頂留子・神谷
- 凡九郎・河井庸佑・高杉鬼遊・小谷葉子
- ・児島与呂志(与呂志報)

老地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

城北川柳會

川口 弘生報

ライバルに刺激をされた新記録
 禁酒した友の便りに刺激され
 はじかみに少し食欲刺激され
 浮き沈み眺めて子供鍛えられ
 隣人に刺激をされて花つくり
 強すぎる刺激の多い社会面
 淋しさはボルノも刺激にならぬ
 平凡な妻へ刺激のメロドラマ
 刺激のない暮しも老いの幸せか
 親友の結婚 娘があわてだし
 秋空へ若いカップルのお月様
 秋の空一人あるきの見月様
 秋空に高く飛び立つ奴唄
 秋の空味覚ばかりに想い行き
 秋の空 夜長に女は仕立物
 秋の空 体育日和へ家族ずれ
 イワシ雲出ている今朝の秋の空
 人情にとっぷり浸る貰い風呂
 秋空へジョッキングの足軽い

南大阪川柳會

中川 滋雀報

うかつだと云わせぬ女のやせた肩
 ライバルに涙をみせていたうかつ
 有頂天うかつに本音吐いていた
 うかつ者同士うかつに気づかない
 コンサートまずラブの字を引いてみる
 辞書閉じて身の振り方を考える
 少し賢くなるため辞書を買いにゆく
 あなたの心が解る辞書を欲しくなる
 メリット考えると愛が冷えてくる
 メリットのない世話はかりする夫婦
 メリットがあり煎餅に丸四角
 遊びにも欲がからむと恐くなる
 ママの目で遊び仲間も選り好み
 程々に遊んだ人の人間味
 遊びの苦が忘れぬ人になる
 遠回りしても英雄には成れぬ
 思い出た景色が見たい遠回り
 人生の隅に本当が住んで居る
 色褪せて都会の隅に朽ちる夢
 米びつの隅にあしたの詩がある
川柳化粧檜 植村客遊子報
 ぬるま湯につかかって明日を考えず
 経験が急かすに登る七合目
 心電図社の底までよみきれず
 コンピュターだから腹を立てず済み
 地価暴騰選挙資金が出来ました
 そうめん流し峠の風もほめて食べ
 水溜れて植木は鉢にしがみつぎ
 くす籠に企業の機密埋すもれる
 田舎にも麦笛を吹く麦がない
 作家の卵くす籠へ夢を盛る

英子 あいき 千代三 一二三 小松園 智子 節子 度 柳伸 薫風 勝美 滋雀 文秋 恒明 綾女 凡九郎 憲祐 岳人 岳詩 秋月 奮水 越山 紅葉 葉香 永楽 大鷹 秋峯

大文字なにわの恋の火も燃える
倉吉打吹川柳會 奥谷 弘朗報 客遊子
 今日限りへ風の速さとなる連呼
 ウィンドのダイヤ横目で急ぎ足
 急ぐよう言って長い立話
 急ぐ日のシグナル赤、赤と出る
 深夜まだふと救急車気にかかる
 耕運機日曜の朝を急ぎたてる
 死を急ぐ少年耐える気力なし
 宝くじ急いで買っても当たらない
 病む妻に急いで帰る厨ごと
 急患に先生不在と云う非情
 席題に時間おわれて気急ぐだけ
 急ぐのに青にならないもどかしさ
 ここ迄を無事に来た旅急ぐまい
 急ぐなという病人の目がうるみ
 急ぐのに要点言わずじらされる
 急ぐのは勝手反則手渡たされ
 あまりにも急いで一から書きなおし
 急ぐ用意地悪ストが足を止め
 火柱が見えてサイレン聞えない
うみなり川柳會 中森葉士人報

舟宏 とみ枝 吟月 富美湖 帆雀 静夫 笑王 華子 熊生 日満 紫泉 柳風 秋女 夕路 しず江 車楽 寿朗 御前 紫泉 吉朗 弘朗 満春 布堂 佳女男 宗則 みやび 碧水 独歩

のはのどと愛感じさす目に出会い

独身はいいな別居の負け惜しみ

長かったトンネル妻が笑う子が笑う

山はほのぼの静かな田み持つ

太陽を背に勝つことを考える

核家族でも孫は風船はなさない

最良の明日へ真赤な陽が燃える

調法にされてメッキがくたびれる

手を触れただけはのぼのと心足る

休耕田の真上で太陽ひからびる

重文の割けたメッキにある魅力

オースケ川柳会 大阪 形水報

手品師のねたは帽子につめてある

まん丸いむきわら帽子二つ行く

甲子園名物帽子があらはれてる

省資源裸に団扇の夏戻る

骨董屋の店頭へ並んだ鯛焼器

考える人の裸になりたいな

解らんが裸像の前に人だかり

裸同志のつきあい喧嘩する

ママのおへそに風鈴の音たまりだす

網棚の帽子の下に客は居ず

生活もそんな調子のノーマット

希満子

天人

源大夫

雄人

葉士人

昌三

とじ江

無人

豊生

洋々

貞山

形水報

野生

光男

鱒

恵美子

千夢

亜也子

栄

信楽

一度

一扇

左遷地がかぶる帽子は影になる

ジャンギヤパン好きで鳥打帽かぶる

蛍光灯を消す順がある警備員

重文の屋敷に煌々と蛍光灯

南海電鉄川柳部(大阪府)辻 圭水報

予約出版後でポツポツ売残り

予約してきてそれからが金のあて

おしやべりが予約の席の横にいた

予約した部屋はホテルの隅の隅

予約してまだ落ちつけずいる幹事

予約制色々稼いでいる歯医者

式場の予約が取れて本決り

釣子約海青あおと晴れる幸

窓からの景色も予約するホテル

キャンセルに世話役困る予約金

天下り重要ポスト予約され

分譲地便利なところは予約済

予約までさせてシーズン高い宿

予約券仲よし二人で買いに行く

連休は子のお守を予約され

波風を立てまいぬるま湯目をつぶる

地下道で酒瓶枕にごろ寝する

弥生

形水

入仙

好郎

摩太郎

清水

清女

小松園

柳伸

千代三

綾女

宏子

千万子

勝美

美乙女

与一

雅風

幸子

登志子

恒明

東雲

千代

相談欄楽しく読んでいる他人

他人の空似かも知れぬ発車ベル

他人には見せない角が妻にある

底辺を活きて他人を意識せず

よく出来た積木ゆすって見る他人

ピーポーが他人へ遠のく音となり

早駆へ探れば票が入り乱れ

深いところで通じ合っている親子

縁談に親子の意見違い過ぎ

嫁に出す親の気持ちと娘の気持ち

待合室若い親子が主役です

探さないようにとしまつたのを忘れ

菜の花句会 高杉 鬼遊報

形勢不利席はずして行くトイレ

気まま一ぱいと云う羽の広げ方

白鼠だったとやめてからわかり

本筋を外れてメンツが歩き出す

潮騒も時計も静止して二人

羽根をすぼめても悪女の名は消えぬ

独楽ねすみノルマだろうか趣味やろか

老の背に逆らい切れぬものがあり

おとなりの鼠に猫を貸してあげ

佐代子

幸代

秀雄

頼次

憲祐

正博

きみ

寿子

悦子

冬花

紀久子

雅風

昭子

誓二

綾女

みずほ

柳伸

恒明

頂留子

柳安子

夕花

小松園

幸代

秀雄

頼次

憲祐

正博

きみ

寿子

悦子

冬花

紀久子

雅風

昭子

誓二

綾女

みずほ

柳伸

恒明

頂留子

柳安子

夕花

小松園

幸代

あつさりと白旗振っているメンツ
賢こい奴やと鼠捕り置きかえる

岸和田川柳会

植山

武助報

商人の策に政府も輪に入り
水滴に紫陽花彩を変えて見る
汗も拭く暇などなくて日本人
昔から日本列島赤い色

本心を話せば誤解とけてくる

操子

風鈴の余韻小さな涼と居る

本心を明かされ一肌ぬぐつもり

こう

役人のように売娘のそっけなし

本心は淋しがりやで動作派手

富志子

民主主義不言実行馬鹿にされ

本心をききたい彼が酔っている

世界人

堂々と一直線の道にする

疑を知らぬ瞳に救われる

辰雄

後半を知っているのでただ歩く
失意の日の夕焼空を忘れない

年頃の娘笑えは毬になる

みづほ

一切れのカレーの肉はいつ喰べる

盆踊り炭坑節もとんで出る

加仙

後半へ力はためているマラソン

梅雨晴間団地の子等のはしゃぐ声

小幡

後半に心臓破りの丘が持ち

白髪染め鏡の中の背が丸い

波津

後半も名人芸は衰えず

降りいでも降っても被害出る皮肉

春栄

終戦の後半生はつげ足しだ

島国の耕地は山を登りつめ

比呂志

後半に挽回遂に逆転す

センブリの効用明治はゆずらない

三十四

店開く肉屋は益の経を読み

島捨てる決意へ夕陽美しき

九平

後半になるとローマは近くなる

店のない回り道する子連れ親

凡智

同窓と初老を笑う坂の上

後遺症さて難民に海がな

真佐志

味噌漬けた肉は魂胆ありそつで

地下街で見知らぬ人に会釈され

天樹

睡ぐつと飲んで禁煙第二日

困つてくるせに話の大き過ぎ

胡蝶

制服もキラキラ少女へ脱皮する

減食が夜眠らせぬ太り過ぎ

君枝

恋人の心を風が読んでる

稲妻が仕掛け火花の邪魔をする

喜醉

ひとりだけ汗をかいてる冷房車

淳水

希久志

お茶席へ汗かき正座するゆとり

汗かきのしあわせ小さな旅が好き

和友

杜の報

秀峰

洛醉

佳加志

敏

六童子

笑風

本蔭棒

与呂志

史好報

好郎

吐来

鬼遊

好石

真砂

憲祐

千代三

勝美

薫風

瓢太

雅風

岳人

吸江

史好

杜の報

杜的

明代

水客

求芽

芳子

和友

小京都世代が変る此処かしこ
小京都寛の音も京になる

見張やぐらの古さを残して小京都
小京都歩けば寺につき当たり

ガラクタを売る店もある小京都
大名の夢を残した小京都

二時間ですっかり見つくす小京都
月赤く日中の暑さまだ残す

月アポロもついで昔前のこと
指月城の夢を見てはる秋の月

川柳たけはら 森井 善居報
たわむれにした指切りが眠らせぬ

母さんの胸に納めておく話
夕やけにきれいなわたしと赤とんぼ

忍従という語を愛す夜のグラス
逃げていてしあわせになれますか

佳句地10選 (前月号から)

恒松町紅選

置物にされると壺に顔がある

愛情を試す小さな嘘ひとつ

私に本音はかしたおぼろ月

結び目の固さに母の愛がある

花園で蝶の不覚は眠くなり

悲しみの深さ喪服の袖に洩れ

包丁も母が造れば母の音

散る事の知らぬ造花で飽きられる

生命ある花へたためらう花鉢

子が入る円をいつでも書いている

美穂

笛珠

白湊子

飛鳥

萬的

紫香

王石

弘三

三求

潮花

善居報

静水

房子

こうじ

文晴

子の寝息今日一日を充実す
さびしさをかくす饒舌だつてある
母になる決意で何もこわくない
炎の中に明日へ続く彩を見る
潮干狩りここにもあつた漁業権
さわやかな朝ゆつくりと枇杷を剥く
一度だけ夫とダンスをしてみたし
一の矢が外れ本気になる凡夫
初夏の雨レインコートが似合いそう
ひとりだからひとりの気持よくわかり
風に彩あきら人間様の恋

妥協せぬ女の鈴が錆びてゆく
明日開くつぼみへ孫の手を叱る
だまし舟沈んで浮いて首洗う
定年の近いポーナス拌まれる
かあちゃんに作つてほしいワンピース
小四紀

川柳しんぐう
ヘルメット男を男の顔にする
ヘルメット淋しきのこる事故現場
雨憎し飯場に並ぶヘルメット
ヘルメットの不満遊びにつかわれる
水しぶき滝の深さを語らない
水しぶき夏ほどの子も海が好き
人工の滝の水しぶきにある疲れ
立読みの足元へくる水しぶき
水しぶき拭つて受験の顔となり
熱帯夜子供汗をふくタオル
熱帯夜金魚の自由なと思つ
熱帯夜ビーポーの音なお著し
主役今日火葬場の鍵手渡され
永遠の主役太陽今日も照る
跡取りの腕に主役の座を託す
ウサギ小屋にも厳然とある主役の座

蘭 幸
不 朽
寛 舟
鈍 子
節 夫
秀 夫
敬 子
菁 居
中一愛
貞 子
眞 路
鬼 焼
かつ子
かつ子
英 詩

主役にもなれずワサビの役処
ライバルがいるから主役おりられず
省エネをタシに耐えさす熱帯夜
主役からもらった子の母すねてみせ
川柳後楽(岡山市) 井上柳五郎報

背信の友と悔悟の手を握り
背信の白い手袋汚い手
背信をする候補者が仮面着て
背信に妻の笑顔が空々し
難題でも金ですめば人はい言
難題を囲みみんな貝になり
難題をさあ聞きますと向き直り
難題を作つて弱点突いて来る
難題を裁く古老が聞かす過去
添えぬなら心中するとう難題
独酌はさせぬのれんを又くぐり
独酌の淋しい小唄に目がうるみ
独酌の忙しき虫が鳴いてくれ
好きなとき好きなだけ酌む独り酒
大安に疲れた顔の親が添い
紋付が通り大安日とわかり
うみなり川柳会 小林由多香報

豊作の稲穂へ謙虚さ教えられ
稲の葉にイナゴの恋がぶらさがり
待望の嫁を迎えて稲を刈る
飯食えぬ稲田に案山子の足が冷え
忙しに見えねば稲の道帰る
台風に耐えねばならぬ稲が立つ
よろこびの手ごたえしかと稲を刈る
宣戦布告すかつと心澄んだ日よ
澄んだ水でも水すまし休みなく
かけり持つ心へ澄んだ水まぶし
亀の歩で男になった文化の日

としま
三男
勇太
石
昌吾
昌吾
梁太
住治
玉水
ひろし
柳五郎
定平
博友
草風
佐加恵
元一
秋月
恒洋
正道
久米雄

義肢はめて再起明るく大地踏む
歩かねばならぬ世間がままならず
二歩三歩あるける試歩をうれしがり
夾竹桃歩く二人も炎えうる
秋分に亡妻に語ればちろ鳴く
香煙が過疎の村からたつ彼岸
お彼岸を忘れず届けて来る花屋
関加桶に雲の浮いてる彼岸晴れ
秋彼岸(ヘルスメーター昇りかけ
駒つむごう会 里

夕立のむごうに捨てた故郷がある
老夫婦あくび出だして寝るとする
色っぽくなつて近頃よく出かけ
夕立に森は神話の闇になる
近頃の美談は裏に何かある
助言した人も傍聴席に居る
めくら判合点のゆかぬまま通り
云い訳も聞かず合点もせぬ社長
あくびうつされて近親感もち
助言者が多くて事を決めかねる
合点は目と目で心通し清す
私にだけ判る伝言板を消す
遮断機の助言にいのちるからす
夕立のあと止まり木が離さない
政治献金合点のゆかぬことばかり
助言は要らんよ君には君の味
一つべんは助言ことわるへそ曲り
合点と叩いた父の広い胸
近頃はオイル連峰乱気流
合点がゆかずも一度紙幣の数を讀み
川柳ささやま 河原みのる報

正 江
とし江
豊 生
貞 山
吟 月
单 車
富美湖
一 汀
静 夫
小路報
信 治
綾 女
千代三
醉 々
恭 太
桐 下
柳 伸
柳 宏子
美乙女
石 捨
規 不風

としま
三男
勇太
石
昌吾
昌吾
梁太
住治
玉水
ひろし
柳五郎
定平
博友
草風
佐加恵
元一
秋月
恒洋
正道
久米雄

義肢はめて再起明るく大地踏む
歩かねばならぬ世間がままならず
二歩三歩あるける試歩をうれしがり
夾竹桃歩く二人も炎えうる
秋分に亡妻に語ればちろ鳴く
香煙が過疎の村からたつ彼岸
お彼岸を忘れず届けて来る花屋
関加桶に雲の浮いてる彼岸晴れ
秋彼岸(ヘルスメーター昇りかけ
駒つむごう会 里

飲めずとも一口口飲めよに満ちたりる

一口口のおいしき隣へくばられる

すみませんこの一口にある平和

父の死へこれから男の顔になり

これからの判れば易者とうに止め

カマキリの鎌上げたままどうするか

かまきりから出そうな酔心地

ようやると喝采飛んだうってつけ

うってつけイミテーションを恵びれず

うってつけ云われて本気でやる度胸

子の嫁にうってつけだと親がほれ

うってつけの屋号のれんが生きている

川柳ウイロー社

前山

北海報

風影

暁舟

雪山

押女

秀山

三石

カロ女

万里歩

梨花

三十四

公女

蒼生

草海

良溪

紅漢

彩民

虹宵

逃げるとも逃げられぬ五十年

もめごとは人にまかせて逃げ話

靖子 文平 近郊 可住 ひか平 久孝 テル 越山 みのる 五月 悠月 百合子

虹川柳俱樂部

新岡回天子報

氣をつけて声かけ合つて門を出る

精霊舟極楽行きが波渡し

子に賭けた夢に子供は応えない

益の十六日西方浄土は蕩雲

孫がいてウルトラマンの名を覚え

燃えていい海の油を救うたいし

一生をこれで良いのか日が暮れる

油欠も何処ふく風か新車シヨウ

霜柱下駄で踏みたり大和路を

階段の一步をふんで天を見る

老妻がかなめだつたと思つて日々

學術の星をつかんでる奴に惚れ

川柳高知

川竹

九官鳥妻そつくりな声で呼び

母親に似る名犬の血統書

自せ物へ隠しきれない錆をふく

自転車から風が降りる向い風

恍惚の耳から風が遠ざかる

頂上の風ふところに生きあがり

つつましく微風が覗く胸ボタン

片親の子が北風に背を向けず

働いた日焼と違う不信感

招かれた席へ飯面をつけて出る

うしろから想像しての脚線美

懸命に闘う病室の灯があかい

踊り子の皆美しゆう見える宵

知らされて喜ぶ程の事てなし

代役は原稿通り読んで去に

年金で遊ぶ隣りへ妻の愚痴

かけぬのも悪し善意のせまい席

庭先の花仏壇へ切る彼岸

子がひとり女過去から逃げ切れず

勝山双葉川柳会

河野 君子報

納得をしても消えない胸の傷

靴音が軽さに人の幸を聞く

軽やかに舞う蝶の明日は考えぬ

おしやべりの軽い気持があととなり

髪形に女でありたい願ひこめ

せりを待つ花それだけの息づかい

蓮の葉に心を盛れば蟬しぐれ

独身貴族母を自由にしてくれぬ

髪染めてあしたのブランド立てている

春の風軽い噂さをもつてくる

生涯を軽い命のまま生きる

川柳塔つえ句会

恒松 町紅報

物価高小遣いだけが据え置かれ

生字引おかげでまずは据え置かれ

猛暑据え置いて台風通り抜け

牙をむく一徹平で据え置かれ

黒板に予定きつり詰む繁昌

黒板の字に先生のお人柄

炎の中へ飛び込んでみる若さ

久子

英子

田鶴子

千里

千世子

緋佐子

いくの

智恵子

夕花

節子

智子

君子

君

紅報

寿美子

虎秋

千代

栄

愚童

耕草

みもの

鶴丸

通丸

舞古

登美也

孤呂二

叮紅

願ひ申します。

本社十一月句会

日時 十一月七日(水) 午後六時
会場 金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271-3935番

兼題 柳話
「効用」
「黒板」
「逆コース」
「据え置き」
席題 当日発表
各題三句以内厳守
費用 三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

12月の兼題 「夜警灯」 「商店街口下手」

12月の常任理事会は3日(月)

1月休会・2月は4日(月)

募集

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選
水煙抄(10句) 川村 好郎 選
愛染帖(3句) 橘高 薫風 選
課題吟(各題5句以内)
「年賀ハガキ」 高橋 千万子 選
「運勢」 谷 真風 選
「猿」 白井 三林坊 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選
水煙抄(10句) 川村 好郎 選
愛染帖(3句) 橘高 薫風 選
課題吟(各題5句以内)
「福豆」 藤田 軒太楼 選
「省エネ」 仲 どんたく 選
「相性」 辻 白浜子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご利用ください。

今月の常任理事会は5日5時から

川柳塔社同人総参加(一人一句)
新年号を飾る

「私の一句」

今年中に発表されたもの

締切十一月二十五日着便まで

あすといわず今スグご出句ください。

(締切後到着は次号発表)

★台風20号のお見舞い申しあげます。

定価 四百円(送料29円)

半年分 二千五百円(送料共)

一年分 四千八百円(送料共)

昭和五十四年十月二十五日印刷
昭和五十四年十二月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 藤原 童心社

〒542 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一―三九八五番

振替口座 大阪・三三三六八番

普通預金口座番号・一〇二七八三

★54年度もあと一冊にこぎつけた。いつも追われっぱなしだからアツというまの十一冊目だった。

★若本多久志氏が入院されたので生々庵主幹の代選となった。責任感の強い多久志氏は医師の許可を得たから選をすると云ってこれしたが、本号はご自重をねがった。

★山村祐先生に本号からご登場いただくことになった

「今さらご紹介するまでもなく「川柳雑誌」時代にも執筆いただいていた。

★岡田甫先生ほかの古句研究の輪講、東野大八先生の快筆、そこへ山村祐先生に加わっていただき、強力な三本の柱で小誌をささえてくださる。

★「はたらくうた」は、第15回を数えることになったが、2ページにおさえること

▼葉子コーナー

▼街路樹の影が歩道をおおうように伸び、いよいよ初冬の訪れが始まるようです。

▼夏の名残りのサルスベリや朝顔が二つ三つペラペラと咲いてます。風雨にたえながら色は精彩を日毎に失っていき、まるで人間が老いて行くように思えてきます。

▼野山は色づき、秘めた恋の情熱が、その一瞬に身を焦がすようでもあります。名残りの朝顔を夏の「花の命」に止めをさすのは後、幾日のことでしょうか。

とにした。執筆各位には申しわけないが当分このスタイルでいきます。

★いつも12月号は、「秀句抄」で飾ったが、本年から中止することになった。句は三賞候補の中間発表や、10月号の二賞発表で紹介されている。これも省ページののため、ご寛容のほどを。

村田瓢太句集「紅華」

★村田瓢太氏の川柳句集が12月に出る。関西奇術教室の校長サンでもあった瓢太氏の句集だけに前評判は上々である。刊行記念句会は来年の六月六日（金）六時からである。お楽しみに。

創刊号あさり

★なんでもいい、創刊号なら買ってしまえと、数年前から本屋を走りまわっているが、編みものや、お化粧法、お惣菜の選び方など、いい加減ムダなものも揃えた。こんなほかに、西森花村氏が俳誌「青玄」と「短歌」の創刊号をわざわざ拙宅まで届けてくださった。とくに「短歌」の創刊号は「釈道室追悼号」とあってスゴイ執筆陣の顔ぶれである。追悼号が「創刊号」と

いうのも珍しいのではないか。

新派はどうなる

★水谷八重子さんが十月一日にガンで亡くなった。映画の処女出演は大正十年、故井上正夫と共演の日活映画「寒椿」と新聞に出ていたが、日活ではなく、「国活」と記憶している。数えて十六歳のお下げ髪の愛くるしい顔がまだ目に残っている。日活で初出演したのは山田五十鈴で、たしか十五歳だったか。これは大河内伝次郎の「剣を越えて」である。

★井上正夫と水谷八重子の

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



「大尉の娘」を見るのが出来たのは、早く生まれすぎてよかったと思う。もうこれらの名優は当分出てこないのではないか。

★映画界では栗島すみ子や田中絹代を抜く人気女優にはなれなかったが、舞台では徐々に女王の座を築いていった。以前はあんなにやせてはいなかったが何度か病氣したためだろう。この人がいなくなると新派はどうなるか。

★またへんなこと引き合いにですが、水谷八重子が俳句的なら、山田五十鈴は川柳的か。（不二田「三夫」）

カッケ 肉体疲労時の
ビタミンB₁補給に
アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠



南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉—忘れえぬ はまゆうの宿

政府登録国際観光ホテル **ホテルパシフィック**

政府登録国際観光旅館 **朝日**

勝浦温泉—海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 **中の島**

湯峰温泉—山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**

和歌山・新和歌浦—海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門—うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 **鳴門**

政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**

紀北・橋本—ゴルフの宿で季節料理

観光旅館 **紀の川苑**

大阪・泉南淡輪—魚つりに ゴルフに

観光旅館 **淡の輪苑**

大阪・なんば—清楚で近代的なホテル

ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄

菊正宗

料理がいきる
辛口の本格派



生酏辛口

きもとからくち



菊正宗

神戸・灘
菊正宗酒造株式会社